
役割を終えた神の子

吹雪桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

役割を終えた神の子

【Nコード】

N8372K

【作者名】

吹雪桜

【あらすじ】

長い長い戦争の最中、召喚された一人の神子は国王と恋に落ちた。訪れた平和。祝福された結婚。けれどその先に待っていたのは思い描いたような幸福ではなかった。

国王と神子

平和になれば必要がなくなるもの。それが神子だ。

神子は争いの中の希望。平和への光。

だから争いが終わった今、神子は未だ不安定である民を安心させるためだけに存在し、それすら成し終えればその役割をなくす。

今、その状態にある神子の名を沢野なずなという。異世界から召喚された少女だ。

長い戦乱に疲弊した国が、最後の手段とばかりに縋った夢物語。――か八かの賭け。

そうして召喚された少女は、何も分からないまま神子として祀り上げられ、いつしか己の意思で神子を名乗り、国に平和をもたらした。

その後は共に支えあってきた国王とハッピーエンド。

そう物語であれば綴るだろう。

けれどそうはいかないのが現実だ。

人の心は移ろうもの。永遠などそうそうあるものではない。

神子と国王は終戦からしばらく国中から祝福された夫婦となった。

それは当然の行く先で、けれど早かったのだ。

出会ったのは緊張状態が長く続く戦乱の最中。辛く苦しい日々の中。共に戦い、共に泣き、共に笑った。

その中で生まれた恋は、果たして本物だったのだろうか。錯覚ではなかったか。

それを知る前に二人は夫婦となった。穏やかで平和な恋人を味わう前に、夫婦となった。

周囲もそれが当然だと思っていた。

神子と国王。物語の結末はこの二人のハッピーエンドで終わっているのだから。

そして二人が歩み寄り、支え合い、好き合った状況を見てきたからだから誰も止めなかった。祝福した。それが永遠のものだと信じた。

「なずな」

「レガート？」

どうしたの、となずなが不思議そうに瞬きした。

それに気まずそうに目を逸らして。そしてまたなずなを見て。

「すまない」

謝る。

なずなはきょんととして、そして微笑む。

「ばか」

王妃である神子が住むべきは王の居室の隣。

けれど神子が今住んでいる場所はそこではない。城にある一角。

人の入りの少ないそこは、神子が望んだ。心許せるものだけを連れて、神子はそこに移った。

「レガートは何も謝らなくていいんだよ」

「だが」

「じゃあこう言おっか。謝られると私が凄く可哀想だって」

「…っ」

なずなの言葉にレガートが言葉を詰まらせる。

すまない。またそう言おうとして、やめる。

なずなが言った言葉は本心ではないだろう。けれど事実だ。

「ほら、もういいから、帰ったげて？」

きつと不安になってるよ、と笑うなずなから、レガートは逃げるように部屋を後にした。

悪いのは、レガート。

責めてくれればよかった。

泣いて怒って罵ってくれればよかった。

けれどそれはなずなのためではない。レガートのためだ。レガートが抱く罪悪感を癒すための術だ。

好きだった。

愛していた。

だから結婚した。

なずなの帰る場所はレガートになった。

故郷から引き離し、帰る場所を奪ったレガートが、なずなの帰る場所になった。

生涯愛し、生涯守り、幸せにしようと決めた。

「レガート様」

戻った部屋には少女が一人。

愛する少女。

少女と出会って、なずなへの想いが生涯貫き通せる恋ではないと知った。

ああ、何て裏切り。

なずなは言う。

どこの恋人同士でも気持ちが変わることがある。だから別れる恋人がいるのだと。国王と神子だけがそうでないとは言えない。

傷ついたくせに。

泣いたくせに。

なのにならなくレガートと会つのを避けていたなずなは、そう言うて笑ったのだ。

自分を殺してやりたいと思った。

幸せに、なんてできなかった。

奪うだけ奪って、何も与えられなかった。

せめて結婚していなければよかった。

結婚したせいで、なずなは新たな帰る場所を得られない。

国の王妃。民の象徴。そうであるなずなは、城から離れられない。

裏切った夫とその夫が愛する少女がいるこの城で、今でも象徴として神子を演じ続けている。

国王と神子2

すまない、と言われた。
すまない、と。

いいよ、なんて言っただけであれなかった。
だって好きだったから。信じてたから。
でもそれ以上に思ったことは、

これから私にどうしろって言うの。

だった。

無理やり召喚されて、神子と呼ばれて。
初めは嫌だった。できるわけないと思った。勝手に決めないでと。
けれどだんだんと周りが見えてくる。

ああ、こんなに求められてる。縋りつかれている。神子と呼ばれた私にしかできないことなのだ。
なら仕方がない。見捨てられなかったから。そしてここを放り出されたら行くあてなんてどこにもなかったから。

皆を助けたいと思ったのも本当。
けれど自分の保身のためであつたのも本当。

そうして辛くて苦しい戦いを乗り越えて。
元の世界に帰れない状態で途方に暮れる前に、レガートに結婚を申

しまれて。

ほんと、した。

好きな人とこれからも一緒にいられるから。

そして、帰る場所ができたから。

そんな気持ちでいた罰だろうか。レガートに他に好きな人ができたのは。

すまない、と苦しそうに言われた。

すまない、と辛そうに言われた。

強く強く握りしめられた拳は、一体どれほどの罪悪感と戦っていたのだろうか。

ごめんなさい、と泣いた。

ごめんなさい、と。

一人で泣いた。泣いて、泣いて。

なのに、

勝手に人を召喚したくせに！勝手に神子にしたくせに！なのに用が
終わったらさようなら？ふざけないで！！

そう、憤った。

最低。

最低。

最低。

感情はぐちゃぐちゃで。

いろいろなものを責めた。

自分を、レガートを、民を、世界を。何でも責めた。

そして全部出し切って落ち着いた頃、宰相が話をしたいと言ってきた。

話の内容はレガートとのこと。放心状態の神子に宰相は痛ましそうに、けれど言った。

「神子は我が国の平和の象徴です。そして陛下の最愛の方。そんな民を裏切るわけにはいきません」

だから、と。

だからどうか、と。

この城にお留まりください、と。

それはこのまま王妃であれと。たとえ形だけであつたとしても、王妃となつた神子として民の前に立てと。そう言っていた。その代わり、居場所はこちらに。

笑った。

泣きたいのに、笑った。

大好きな人。

レガートも、そして目の前の宰相も。他にもたくさん大好きな人がこの国にはいる。

でも、レガートは他に好きな人ができて。宰相は国のために城に留

まらせようとして。民はそんなこと知らずに神子様と、王妃様と呼んで。

それら全てを我慢する代わりに、居場所をなくさずにすんだ。

そんな状況に、笑うしかなかったのだ。

友人と神子1

聖堂で祈りを捧げる。

今ある平和への感謝を。

そして永久の平和を。

一人、ただ静かに祈りを捧げる。

心から祈ることができなくなって久しいけれど。

神子として。

王妃として。

そつと伏せていた瞼を上げて、ゆつくりと顔を上げる。

見えるものは朝一番に汲み上げた水が並々と注がれた聖杯。

初めの神子が神から授かったと伝えられている聖杯は、不思議なことに翌日になれば空になる。

零れた様子もないことから、神が地上に降りてきて聖杯の水をあおって天へと帰るのだ、と言われている。

それをなすなはじつと見る。

神がいるのか。

この世界に神はいるのか。

いるのだろう。だからなすなはここにいる。神に王が願ったからこそ、召喚された。

なすなは神に会ったことはない。声を聞いたこともない。

けれど聖堂にいくと思う。何かが見えている、と。

両親に見守られているような、そんな気持ちがする。

だからなずなは聖堂にくるのが嫌ではなかった。それを感じたかった。
けれど。

「私は、今でも神子なの？」

心から祈れない私は、今でもあなたの子供なのですか。そんな、不安。

いつかこの温かな眼差しを失うのではないかと。それが、怖い。

また目を伏せる。

胸の前で組んだ手を口元に当てて。

聖堂の鐘が鳴るまで、じつとそのままだった。

聖堂を出る神子を眺める。

神子はこちらに気づく様子もなく、城へと戻っていく。

彼女に従うのは二人の兵士。彼女を守る兵士。

「遠い、な」

思わず呟く。

それに冷たい視線を寄越すのは幼馴染の侍女だ。

彼女は神子と共に部屋を移った。国王の隣室から離れた部屋に。

自分は連れて行ってはもらえなかった。当然だ。国王親衛隊に属する人間をどうして連れて行けるだろうか。

けれど連れて行ってほしかった。

「お前はいいな。側にいられる」

「あなたは馬鹿ね。だから言ったのに」

親衛隊に入ったら、自分の好きになんて動けないわよって。確かに。

けれどあの時はそれが一番いいと思っていた。国王を近くで守れる親衛隊に入れば、守りたいもの全て守れるのだと思っていた。

けれど一番動きが取りづらい場所だった。国王を守るのだから当然だが、規律が一番厳しいところだった。そして最優先は国王。

「陛下を守ることが守りたいものを守ることになるんだって思ったんだ」

なのに違った。

親衛隊が守るのは国王だ。

国のために必要な国王。

「俺が守りたかったのは、俺の大切な人達だ。お前や両親、友人。なすな」

神子ということで距離を置いていた。

手の届かない、ある意味国王以上に尊い人。

そう思っていた。

なのに幼馴染が楽しそうに話す神子は、普通の少女だった。

そして実際に接してみれば確かに普通の少女。幼馴染と何も変わらない。

幼馴染を友人と呼んで。実は幼馴染に片恋を抱いている自分の相談

に乗って。

気がつけば自分も神子に友人だと呼ばれていて。自分もそうだと思うようになった。

他に人がいる時は自分も幼馴染も神子も、それぞれの立場を取ったけれど、三人しかいなければどこにでもいる友人同士のように馬鹿を言って笑った。

そんな日はもうこない。

「何で俺、お前の言うこと聞かなかったんだろっな」

「馬鹿だからでしょ」

「ひでえ」

容赦ない幼馴染は小さく笑って。

「あなたは親衛隊で、なずなは連れて行けなかった。でも友達でしよう？それは変わらないでしょう？」

「でもこんな時に側にいられない」

「私がいるでしょう。ほら、伝言は？」

幼馴染を見る。

大切な友人の側に、今でもいられる幼馴染を。

「また相談に乗ってくれ」

それは再会を匂わす言葉で。

また友人として側にいけるかどうか分からないけれど、そうしたい心を伝えるもので。

「何の」

「お前は知らなくていいの」

お前への片恋の相談なんてどうして言える。
きよとん、とした幼馴染に笑った。

戻した視線の先、神子はもう見えなくて。

ああ、またあの笑顔が見れるだろうか、なんて考えた。

友人と神子2

召喚された神子の世話係を仰せつかったのは、神子と年が近いからだ。

それはただの建前だと知っていた。

普通ならば神子という尊い存在の世話係は古参の侍女がするものだなに行儀見習いとして城に上がった自分に白羽の矢が当たったのは、神子は誰もが思い描いていた神子ではなかったからだ。この人がいればもう大丈夫。そう思わせてくれる神子ではなかったからだ。

泣いていた。

家に帰してと泣いていた。

誰が何を言ってもそんな調子で。

誰もがうんざりしていた。これが神子か、という目で見始めた。

だから誰もが嫌がった。こんな神子の世話などしたくはない、と。だが誰かが世話をしなければいけない。どうする。

そうした理由から押しつけられた世話係。

初めはどうして、と思った。嫌だと思った。けれど逆らうこともできずに側に上がって。

家に帰してと泣くのだと聞いていた。

神子なのに。

この国を救ってくれる神子なのに。

けれどこの目で実際に見てみれば、大きな衝撃がこの身を襲った。

自分と年がそう変わらない少女がお母さん、と泣いている。お父さ

ん、と泣いている。家に帰りたいと泣いている。
その姿は自分を殴りつけたくなるほどの衝撃だった。

当然だ。当然ではないか。

神子にも両親がいるのだ。親しんだ世界があるのだ。そこから引き離されたのだ。泣いて当然ではないか。

その心情を思いやることもなく、この国を救ってくれなどと。思い描いた神子ではないから、と厭うなどと。

ああ、神子の目に自分達は一体どういうふうに見えているのだろうか。悪魔のように見えているのではないだろうか。

そう思えばたまらなくなった。

自分達の傲慢さが、神子の孤独がたまらなくて、神子の側にいるようにした。

返事がなくても話しかけて。泣く神子の背を撫でて。

そうしていつしか神子がこちらを見て、相槌を打って、笑って、友人と呼べる仲になって。

神子として国のために働いていた時も、結婚して王妃になった時も、与えられた部屋から離れた時も、ずっとずっと側にいた。一緒にきて、と言ってくれた時、どれほど嬉しかったか。

…最後の時だけは、嬉しさよりも悲しさと悔しさの方が上回っていたのだけだ。

「なずな、ケーキ食べる？」

「食べる！」

王の居室の隣にいた頃とは違って、なずなと二人っきりの部屋は静

かだ。

なずなと一緒に移ってきた人間はまだいるけれど、こうしてなずなを直接世話するのは自分だけだ。他は皆別の仕事をしている。静か。

「そうそう。あの馬鹿から伝言があるのよ」

「…馬鹿って」

苦笑するなずなに、だって馬鹿だもの、とケーキを差し出す。

馬鹿。国王親衛隊に属する幼馴染。そのせいで自由に動けない現状を思い知ったなずなの友人。

「また相談に乗ってほしいって」

一体何を相談していたのやら。

そういえば時々二人で何やら話していた。なずなも幼馴染も真剣な顔をしていて。けれど幼馴染が仕事に戻れば、なずなは楽しそうにこちらを見ていた。それだろうか。

そんなことを思っていると、きょとん、としたなずなが、嬉しそうに笑った。

「そっか」

うんって伝えて。

そう言つて機嫌よさそうにケーキを頬張る姿に、ああ、妬けるかも、と思った。

笑うことが減った。

微笑むことが増えた。

全ては夫である国王の心変わりゆえ。

そしてそれでも神子を手放すまいとする国ゆえ。

耐えて、耐えて、耐えて。

そうして昔ほど大きな感情を見せなくなつた。

だからこんなに機嫌がよさそうな姿は久しぶりを見る。

もっとずっと笑っていて。

そんな願いは今は難しいことを知っていて、それでも願った。

宰相と神子

気にしないで、と微笑む。

誰も悪くないでしょ、と微笑む。

泣いたことが分かる赤い目で。

泣いたことが分かる擦れた声で。

この城に留まってくれと。

王妃のままで、神子のままで国のためにどうかと。

そんな残酷な言葉を紡ぐ己に神子は気遣いの言葉をかける。

責めてくれればよかった。

初めてこの国に現われた時のように、ふざけないでと責めてくれればよかった。

それでも彼女は責めない。責めることではないとそう己に言い聞かせているのだろう。

国王が思いつめた様子で宰相を尋ねてきた時、神子ではない他の女性を愛してしまったと打ち明けた時、責める言葉を呑み込んだ己のように、神子は言葉を呑み込んで。

呑み込んで。

ぐつと拳を握る。

申し訳ありません、と。そんな言葉は何の救いにもならない。何の癒しにもならない。こちらの気が楽になるだけだ。

それでも、神子を前にすればいつだって言葉が滑り出る。そうして

神子に氣遣われるのだ。氣遣うべき己が、氣遣われるべき神子に。

申し訳ありません。

申し訳ありません。

申し訳ありません。

それでも、あなたを手放せないのです。

ああ、何て勝手な。

そう思いながら、手に持つものを視界に映して顔をしかめる。

顔をしかめて、それでも歩みを止めない。止めることができない。

国を守りたかった。民を守りたかった。

今でもその気持ちに変わりはない。ない、けれど。

今では宰相である己を厭う気持ちが生まれる瞬間が、必ずあるのだ。

と神子

声を、聞いた。

気のせいかな、と思うにははっきりとした声。

どうしたものか。

そう思っていれば肩に下りる鳥が一羽。

視線を向ければ鳥もこちらを見ていて。

「お前達の話信じていなかったわけではないのだが」

はあ、とため息。

鳥達の噂話と聞いた声が告げた言葉。それは一致していて。

だからどうというわけでもないのだけれど、ただどうしてとは思いつ。
どうして自分なのだと。

…本当に、どうして身分も地位もない自分なのだ、と天を仰ぐ。

「どうしろと言っんだ」

チチ、と鳥が首を傾けた。

民と神子

神子様。

王妃様。

そう呼ぶ声に微笑み手を振る。

隣には同じように民の声に応え、微笑み手を振る国王。

時に顔を見合わせ、微笑み合う姿に民は更に沸きあがる。

国を救ってくれた神子と国王。

国のために戦い、勝利した神子と国王。

その二人が愛し合い結ばれて。そうして仲睦まじい姿を民に見せる。それは何より民を安心させ、民を活気づかせる。

それはテラスの上、神子と国王は眼下に集まる民へと向けて言葉を放ち、そうして二人寄り添いあつて城の中へと戻っていく。その後ですらも、民は大きな声で神子と国王を敬う声を上げるほどに。

城に戻った二人が、神子がすいっと国王から離れ、国王が何とも形容しがたい表情でそれを許したことも知らずに。

微笑んで手を振り去っていく神子を、罪悪感に押しつぶされそうな目で見つめる国王がいることも知らずに。

民は神子と国王を称え続ける。

恋人と神子1

聞こえる歓声に目を伏せる。

あれは神子と国王を慕う民の声。

二人の幸せを信じて疑わない民の声。

それがもう崩されているのだと知っている己の耳には、それら全てが己を糾弾しているように聞こえる。

ごめんなさい。

唇が小さく動く。

声ない言葉は誰にも聞こえない。

己にも、届けるべき人にも。

どうしてこうなった。

どうしてこうなった。

どうして、どうして、どうして。

女は城で働く侍女だった。

上流貴族である女が侍女をしていたのは、いわゆる花嫁修業のためだった。そして花婿探しのためだった。力のある貴族の子息を射止めなさいと、父親の命令だった。

そうして城で侍女をしている令嬢は己の他にもいて。皆が仲間で、皆が敵だった。

そんな環境に何年経っても慣れることができなくて。父親の期待が重くて。そうして一人ふらふらと息抜きのために人気の少ない場所を目指して。

そうして出会った。それで終わりのはずだった。

「カーシェ」

耳に届いた低い声。

振り向けば愛しい人。

ずっと胸の内が温かくなる。

「レガート様」

おかえりなさい。おつかれさまでした。

寄り添いあい、微笑みあつて、抱きしめあう。

鼻をくすぐる愛しい人の匂いに、安堵したように息をつけば、頭上でも同じ息の音が聞こえた。

抱きしめてくる腕に力が込められた。

抱えた罪悪感から逃げるように。それとも耐えるように？

それはお互い様で、女もまた抱きしめる腕に力を込める。

愛しい人。

先程まで民の前に立っていた人。

神子と共に微笑んでいた人。

神子の夫であるはずの、この国の国王。

女の、恋人。

国王が愛を囁く。

それを受け止め、同じものを返す。

愛している。愛しています。

それが甘く優しいものだけではないと知っていながら、それでも互いの胸の内にある罪悪感をゆつくりと眠らせていく。
また不意に目覚めるのだけれど、今はただ互いを腕に、

多くの人達を裏切る。

恋人と神子2

しまった、と思った。

聞きたくない声を聞いてしまったということは、ぼーっとしている間に避けていた場所に足を向けてしまったということ。

戻らなければ。姿を見る前に戻らなければ。

なのに遅かった。見てしまった。侍女を後ろに花を眺める少女を、見てしまった。

少女は可愛らしかった。

微笑む姿はほんわかと癒される。

その少女がなずなを見ると罪の意識にしろつか、目を伏せることを知っている。

その少女が国王を見ると花が咲き綻ぶように笑うことを知っている。

少女は国王が愛する恋人だった。

少女は決して悪い人間ではない。

なずなから国王を奪おうとしたわけではない。結果がそうだっただけのことだ。

どうして国王と少女が想いを通わせたのか、なずなは知らない。

けれど見つけたのは国王だと聞いた。想いを抑えられなかったのは国王だと聞いた。そしてそれを最後まで拒みきれなかったのが少女だと聞いた。

その結果が今だ。
なずなは名ばかりの王妃となり、少女は妻を名乗れず愛人と呼ばれる。

そのことを民は知らない。知らないけれどもいつまでも知らないままではいられないだろう。いつかは知る。

そうなれば国王は少女を守るために動くだろう。宰相も動くだろう。そしてなずなも恐らくは王妃として少女を許容している姿勢を見せることになるだろう。

ぎり、とドレスを握る。

嫌だ、とか、したくない、だとか、そういうことではなく。

許したのは本当のことだ。身を引いたのは自分なのだから、少女を守ることを厭うわけではない。
ただ。

押し込めている負の感情が暴れだそうとしている、だけ。

帰ろう。

少女に見つかからないうちに、帰ろう。

見つければ少女はまた目を伏せる。少女の侍女達は憐れむようにこちらを見る。そしてこの胸はきしむ。

そうなる前に、帰ろう。

踵を返してその場を後にしようとして、聞こえた少女の声。

「レガート様！」

肩が震えた。

振り向きたくなくて、なのに足は止まって。

聞こえてくる少女と国王の声。

以前は自分に向けられていた優しく甘い声が少女の名前を呼んで少女が嬉しそうに答えて。

一人、見つからないように息を潜めている自分はなんて、なんて口を手で覆う。

震える体をもう一方の腕で抱きしめる。

ああ、ああ、ああ。

なんて、惨め。

思わず涙が頬を伝った。

恋人と神子3

「愛している」

そう紡いだ唇を、信じられない想いで見つめた。
本当？

そう紡いだ己の唇に、本当にと紡いだ唇が下りてきた。

流れる涙は歓喜。

誰よりも側にいてくれた人。

誰よりも守ってくれた人。

誰よりも守りたかった人。

帰ることができない故郷への寂寥を慰めてくれた人。

好きだった。

大好きだった。

愛していた。

たとえ打算が混じっていたのだとしても、彼を愛していたことは事実だった。

「愛している」

今は別の女性に紡がれるその言葉を紡いでみる。

一人、誰もいない部屋で紡いでみる。

受け止めるべき人のいない言葉を。

「馬鹿じゃないの」

帰りたい。

そう思った。

帰りたい。帰りたい。帰りたい！！

側にいてくれる友人がいる。

遠くにいても気遣ってくれる友人がいる。

彼らがいなければとつくに叫んでいた。

家に帰して！！

流れる涙。洩れる嗚咽。

愛する女性を腕に抱いて、愛する男性の胸に抱かれて。
そうして微笑みあう二人が脳裏に浮かんで。

「かえり、たい」

呟いた時、ふ、と風に紛れて知らない匂いを嗅いだ。

何だろう。

香水、じゃない。花の香りでもない。

何だろう。

知らない…知って、る？子供の頃嗅いだことがあるような。

何だろう。何だろう。

そうだ。

これは。

これ、は。

綺麗な薔薇の庭。薔薇の香り。そうじゃなく。

綺麗に大切に手入れされた色とりどりの花。そうじゃなく。

神子だから。王妃だから。ここは王城だから。だから目につくはず

もなく。触れられるはずもない。

そんな匂いがする。

草の、匂い。

家族で出かけたピクニック。

駆け回った草の上。

敷き詰められたシロツメクサ。

母親と二人で作った花冠。
笑う父親の頭に飾って。

駆け巡る思い出に心が逸った。
その匂いがどこから漂ってくるのか、探さずにはいられなくなった。
そうして顔を上げた先、

知らない男が、いた。

魔法使いと神子1

「ふうん、神子が虜囚って話は本当だったのか」

目を見開いたなずなの目の前には男が一人。窓の外、簾の上に片膝を立てて座っているローブ姿の男。

男は被ったフードの下、笑みを作った。

「だれ？」

宙に浮いている。

元の世界でもこの世界でも空を飛べる人間はいない…はずだ。

必死で記憶を漁る。

今まで読んだ本の中に書いてあっただろうか。

今まで聞いた話の中にあっただろうか。

探して、探して、探して。

男が笑った。

「すまないな。誰にも見つからずに神子に会おうと思えば、飛んでいくしかなくてな。下は兵士達がいるだろう？」

だから飛んできたんだが、驚かせて悪かった。そう言うと、男が下を見た。

「悪いついでに中に入れてもらえるか？」

「は、あ」

どうぞ、と体をずらすと、男が室内に足を踏み入れた。手には簾。

じつと見てみるが普通の竹箒だ。

その様子に男が笑って、ぱっと手を離れた。すると箒はそのまま宙に浮か…ばずに、床に落ちた。

「…浮かない？」

「浮かない」

なずなはしゃがんで箒をつつく。つづいて、転がして、持ち上げて。
「箒だ」

「そう。何の変哲もない箒」

じゃあ何で浮いてたの、と男を見上げると、男が箒を手にとって魔法と一言。

それになずなは目を見開いた。

魔法を使う人間は少ないと聞いている。なかなか難しい技術で、習得するのが酷く大変なのだと。

だからこそ貴重で。その存在は重宝されているのだと。

城にもいる。

王宮魔法士と呼ばれる彼らは、普段は専用の棟で魔法の研究をしているという。

ならばこの男は城の魔法士なのだろうか。宙に浮いていたのは研究の成果？

男は壁にもたれてなずなの視線に首を横に振って答えた。
違う、と。

「俺は魔法使いだ。聞いたことはないか？古の魔法使いの話」

「古の…って、初めの神子がいた頃の？いつの間にかいなくなつて、霧の森に隠れ住んでるって」

「それだ」

その一族の一人なのだった男は、一年前に独立して森を出たのだと続ける。

そこで神子が召喚されたことも知ったし、神子と国王が結婚したことも知った。

そして、国王に恋人ができたことも、神子がこうして虜囚になっていることも知った。

最後の言葉になずなは驚き、そして男を睨みつけた。

「何の話？」

「事実だろう？ そうでなければ神子が城の中心から離れた場所にいるはずがない」

「違うわ。私が人の多いところが落ち着かないってワガママ言ったのよ」

「へえ？」

男が笑う。

ロープで顔は見えないから口元だけだけれど、分かる。明らかに信じていない笑いだ。

けれどそれを信じさせなければいけない。なずなは神子だ。民へ安心を運ぶ神子だ。国王と神子が幸せに暮らしているという幻想を崩してはいけない。それは民を不安にさせる。

…それをさせないこと。それが自分が居場所を与えられた理由なのだから。

「なら、どうしてこの部屋には魔法がかけられている？」

「…え？」

男は笑いを引っ込めて部屋を見渡した。

つられて辺りを見渡すが何も変わったものはない。

「お前がこの部屋から出ればどこかに伝わるようになっている」
「え」

なにそれ、と目を見開く。

そしてそういえば、と思いついたことがいくつか。

気分転換に部屋を出て、庭に出ると部屋から見た時はいなかった兵士がいたり、図書室へ向かっていると、何故か管轄の違うメイドに声をかけられたり。

気にしていなかった。気にしていなかったけれど、言われればもしかして、と胸が冷えた。

「逃げないように監視されていると考えるのが普通だろう？」
「うそ！」

そんなこと、レガートがするはずがない。

レガートはなずかに罪悪感を抱いている。いつだってなずなを見る目は苦しそうで、申し訳なさそうで、自分を責めていて。そんなレガートがそんなこと。

「それと、それ」

「ど、れ？」

「その腕輪。誰にもらった？」
「だれって」

男が箒の柄で指すのはシンプルな作りの腕輪。細い輪が三本連なっているもの。

それを思わず凝視する。

「これ、は、宰相が」

この部屋に移ってしばらく、様子を見にきてくれた宰相がくれたものだ。

常に身に着けていてもらえると嬉しい、と。

そして…ああ、そうだ。すみません、と辛そうに言われた。

てつきり今の状況のことだと思っていた。思っていた、けれど。

「お前がどこにいても分かるように、魔法がかけられている」

どちらの魔法も罪人にかけられるものだ、と言つ言葉に、頭が真っ白になった。

魔法使いと神子2

放心したように男を見るなずなに、男は眉を寄せた。
うそ、と紡ぐ唇が歪んで、

笑った。

目から涙がぼろぼろと零れ落ちるのに、唇は笑みを作った。

「あなたの言ってることが、どうして本当だと信じられるの」
「信じる信じないはお前の自由だろう？」

神子。

国に平和をもたらすために召喚された少女。

民に希望を与え、疲弊した国に活気を取り戻し、平和を与えた少女。
国王と結婚して、幸せに笑っているはずの少女。

初めて神子が虜囚になっていると聞いた時は信じなかった。

国王と神子もまた感情ある一人の人間なのだと分かっていたの
のだろう。

めでたしめでたしから先があるなどと考えてもいなかったの
だろう。
だから驚いた。

神子が住む城の一角には魔法がかけられていた。

神子に仕える使用人達もまた、魔法がかけられたものを見につけさ

せられていた。

そして神子の部屋にも、神子自身にもその魔法はかけられていた。

それは神子を逃がさないためのもの。

それは神子が余計なことを洩らさないためのもの。

神子の行動、言動の一部始終が誰かへと伝わるようにとつけられた監視の魔法。

それらが繋がる先は、と目を凝らせば見える。

城の中心にある部屋。机の上に置かれた水晶玉の中へと全て全て。持ち主は、

王宮魔法士を統括する魔法士長。

「信じる？信じない？そんなこと」

なずなが呟く。

視線をなずなに戻せば、なずなが笑った。声を洩らして、笑った。

「だってどこかに行こうとしたら、誰かがくるの。必ず誰かが側にいるの。前はそんなことなかったのに」

それに、とうつむく。

「謝ったわ。腕輪を見て、目を伏せたわ。拳が震えて、たわ」

腕に嵌った腕輪を見るたびに、一瞬だけど目を逸らすの。

そう言ったなずなは、ぎゅうつつと絨毯を握るように拳を作った。

神子は虜囚。

神子はどこにも行けない。

だから。

そう言った声に従ったことは、おそらくは正しかったのだ。

神子が床を叩いた。

魔法使いと神子3

笑う。

笑う。

笑うしかない。

ぽたぽたと絨毯に落ちる涙。

強く強く握りしめた両手。

なのに発する声は笑い声。

「私が、神子だか、ら？」

いなくなられては困るから。

そして国王との現状を民に知られては困るから。

「だから、なの？」

辛そうに謝罪した宰相。

彼も辛かったのだろう。こんなことしなかったのだろう。

けれど彼は宰相だ。国を守る義務がある。国を治める国王を守り支える役目がある。

だからどうした！！

ぶんと拳を振り上げて床に叩きつける。

裏切られた、という気持ちが膨れ上がる。

確かに打算はあったのだ。どこにも帰れないから、もうここしかないから、だからそれに縋りついたのは自分だ。

けれど信じていた。一緒に戦った彼らを。彼らを責めずに受け入れるほどには、彼らを好きだった。なのに彼らは信じていなかったのだ。なずなを信じていなかった。

どこかに行かれないように。

誰かに現状を洩らさないように。

彼らはなずなを疑った。

しやらしやらと鳴る腕輪。

こんなもの、と掴んで腕から外そうとする。

こんなもの、大事に持っていた自分の何て愚かなこと!!

なのにそれを阻まれた。

顔を上げれば男。なずなに彼らの裏切りを教えた男。

ああ、この男さえこななければ自分は何も知らないでいられたのに。

睨みつければ、頭を撫でられた。

目を細めて、ああ、だからかと男は呟いた。

「だからお前を助けてくれと、俺に頼んだのか」

神と神子

声は訴える。

助けてほしい。

神子と呼ばれるあの子を助けてほしい。

私には何もできない。あの子に声を届けることも、あの子を抱きしめることもできない。

愛する男に裏切られて傷ついて。なのに神子であるがために離れられず。けれど神子であるがために、異世界での居場所を得て。忘れてしまいたい想いを抱えているというのに、同じ城に住むがために傷口に塩を塗り込められて。

そんな苦しみの中にいるものが、他への幸せを心から祈れるはずもないのに。それが当然のことだというのに、あの子はそのせいで私に見捨てられるのではないかと怯えている。

私の子。神の子。

この国を愛している。王もその思いは同じ。だから王の思いに応えて力を貸して。その結果召喚されたあの子。

初めの神子とあの子は違った。

初めの神子は己の世界に絶望していた。奪われてばかりの己に絶望していた。だから神子を求めるこの国に尽くした。尽くして、その分返されて。

初めの神子は幸せだった。この国にきて初めて幸せになった。

あの子は違う。

あの子は違った。

あの子が負った傷は私のせいでもあり、あの子が流した涙もまた私のせいでもある。

なのに何もできないのだ。あの子を帰してあげること、あの子の涙を拭ってやることも、あの子に愛していると伝えることも、何ひとつ。

だからどうかあの子を助けてほしい。

あの子の涙を拭ってやってほしい。

何でもいい。あの子に神子として以外の居場所を、どうかあの子に。

声は訴える。

切実に。

切実に。

聞くのは男。一族から独り立ちしたばかりの男。

声は選んだ。

国王と神子3

「なずなが？」

聞かされた言葉にレガートは目を見開く。

なずなが部屋から出てこないというのだ。もう三日も。

どうして。何があった。最後に会った時は閉じこもるような様子は見せなかったのに。

そう思つて、見せなかったも何もレガートが心変わりをしてから、なずながレガートに本心を見せなくなったことを思い出して顔をしかめた。

見せるはずがない。裏切った男に、その裏切りを許容しなければいけない状態に追い込んだ男に見せるはずがないのだ。

「何か心当たりは？」

「妃殿下付きの侍女に聞いたところによると、三日前、外からお歸りになられた時にはすでに」と

しばらく一人にしてほしいと言われて今に至るのだと。

三日前、外で何かあったのだろうか。

「何故すぐに報告してこなかった」

「……妃殿下が部屋に閉じこもられたのはこれが初めてではないからだと」

「何？」

普段は何事もないように過ごしているが、時々ふつと思ひ出したように閉じこもるのだと。

その時も誰も側には近寄せず、けれど一晩過ごせば部屋から出てくる。いつもの微笑みを携えて。

原因など言わずもがな。だからこそ侍女はレガートに報告しなかった。報告してどうなるものでもない。むしろ報告してレガートがなすの元を訪れることの方が問題だった。閉じこもるほど落ちていく時に、その原因に現われてなどほしくない。

侍女のそんな心境を聞かされなくとも悟ったレガートは、苦虫を噛み潰したような顔で黙る。

何も言えることなどなかった。

「どう、いたしますか？」

今回レガートに報告が上がったのは、いつもと違ったからだ。いつもと違って三日も経ったからだ。本当は報告などしたくはなかったのだろうに。

「…先触れを」

「妃殿下の元へ？」

行くのか、と侍従が目を揺らした。

それにああ、と頷いた。

行っても傷つけることしかできないくせに、頷いた。

侍女が頭を下げる。

一瞬絡んだ視線は決して歓迎したものではない。

ああ、そういえばこの侍女はなずなと大層仲がよかった。まるで姉妹のように仲がよかった。

レガートがなずなという時は侍女である態度を崩そうとはしなかったが、遠目に見た二人はよくじゃれあっていた。

ならば恨まれているだろう。恨まれて当然だ。目を伏せる。

「ご案内いたします」

「いや、いい」

そこにいてくれ、と短く言えば怪訝そうに上げられた目。けれど承知いたしましたと再び頭が下げられる。

本当ならば二人になどしたくはないのだろうが、一介の侍女が国王相手に否を唱えることは許されない。

内心はどうあれ、侍女は足を進めるレガートを見送った。

…背に突き刺さる視線は殺意すらもっているのではないか、と思わされるものだったけれど。

なずなの部屋の前、足を止めて手を上げる。

けれどその手はなかなか扉を叩かない。

ここまでできた。ここまでできたけれど、一体何を言おうというのだろうか。何をしようと言っただろうか。

今まではなずなが微笑んで迎えてくれた。胸の内を隠して微笑んで、まるで弟を見る姉のような態度で接してくれた。

それはレガートを気遣ったことだ。なずなを傷つけたレガートが

抱く罪悪感を刺激しないように、気遣ってくれたからだ。

それに甘えていた。

傷つけたという罪の意識に苛まれながらも。

どうあっても償いがない苦しみに悶えながら。

なずなは微笑んで、許してくれるから。

今この時になってようやくそれに気づく。

この扉の向こうになずなはいる。泣いているのだろうか。憤っているのだろうか。微笑んではくれないだろう。

そんななずな相手に、一体自分はどうしようというのだろうか。

怖い。

怖い、なんて…どこまでも。

唇を噛む。

そして扉をノックしようと手首を動かして、

「うきゃあー!」

聞こえた声に思わず音を立てて扉を開いた。

国王と神子4

「レ、ガート？」

目を見開く。

窓から落ちそうになったせいで、ばくばくと脈打つ心臓の音を聞きながら、なずなは突然扉を開けて入ってきたレガートに怪訝そうに首を傾げた。

「どうしたの？」

「あ、あ。部屋から、出てこないと、聞いたものだから」

様子を見に、と徐々に目を逸らしていくレガートに、しまったと思う。

今までも部屋に閉じこもったことはあったけれど、今回ほど長く閉じこもっていたわけではなかった。だからレガートに報告は行かなかった。周りが気を遣ってくれたからだ。けれど三日も閉じこもっていれば連絡もいくに決まっている。

思わず胸にやった手からシャラツと音。それに眉をしかめそうになって何とか止める。

この腕輪が何のためのものなのか、なずなが知っていることを気づかれてはいけない。レガートがこの腕輪の意味を知っていようといまいと、だ。

どこにいても分かるように。発信機の役割を果たしているこの腕輪。信じていた宰相からの贈り物だと思えば胸が痛い。そして常に監視

されているのだと思えば込み上げる不快感。

本当は外してしまいたかった。床に叩きつけて、窓から放り投げてけれどそれを教えた男は止めた。そんなことをしても変わらない。監視はやまない。下手をすれば更に厳しいものとなるだろうと。

そんなことない、と言えればよかった。そんなことするはずないと。

信じてもらえなかった。監視されていた。その裏切りが言わせなかった。言わせてくれなかった。

そんな現状を受け入れがたくて、部屋に閉じこもって。

そのせいでレガートに会うことになった。もう自分のものではない夫に会うことになった。

この三日に比べれば幾分余裕を取り戻したとはいえ、まだ微笑を繕うまではいつていないというのに。

「心配かけて、ごめん。ちょっと体調崩してて、誰にも会いたくなかったの」

「…医師を呼ぶか？」

「ううん。もう平気」

そうか。

そう言っただけ黙ったレガートが、ふ、と怪訝そうに表情を変えた。

「レガート？」

「…何の香りだ？」

「香り？」

きょとんとしてレガートを見る。

何か匂うだろうか。レガートが言う香りを探して見る。探して、あ、

と気づく。

草の匂いだ。つい先程まで草の匂いを纏う男がこの部屋を訪れていたから、微かながらも残ったのかもしれない。

けれどそんなことは言えない。あの男はいわば不審者だ。不法侵入者。

結界の張られた城に誰にも知られずに入り込んだうえに、神子であるはずなの部屋にまで入り込んでいるのだから、立派な犯罪者だ。別に何をしていくわけでもないが。

男は連日この部屋を訪れる。けれど何をしに、何のために訪れるのかは知らない。ただ頼まれたと言っただけだ。誰に何を頼まれたのかまでは語らない。

始めは知りたくもなかったことを知らせた男に悪感情を抱いた。けれど頭を撫でられた瞬間、吹き飛んだ。

フードのせいで顔は見えない。けれど聞こえた声は優しくかった。憐れんだものではなく。嘲るものでもなく。優しくかった。

まるで聖堂で感じた視線のように、優しくかった。

だからなずなはレガートに言う。不思議そうな響きを乗せて。

「分かんない、けど。何かする？」

気のせいかとレガートが首を傾げるのに、同じように首を傾けた。

魔法使いと神子4

とん、と簾から下りると、ドアの鍵を開けて中に入る。漂う香りは薬草の匂い。

部屋に吊るされたものは薬草を乾燥させたもので、棚に並んでいるものは薬草を煎じたもの。子供の頃から見慣れた光景だ。

手に持った簾を所定の場所に立てかけ、フードを落とす。

十分注意してはいるが、万が一姿を見られた時に顔を確認されないように被っているのだが、それだけではない。

城には結界が張られている。許しのないものが触れれば王宮魔法士に知れるように、だ。

男には当然だがその許しがない。普通に触れれば神子に会うところではない事態になる。だからローブに結界に触れたことを知られないための魔法を織り込んだ。

そのおかげでまだ城に忍び込んだことを王宮魔法士に気づかれずにいる。

そんな優秀なローブを脱いで椅子の背にかければ、窓に下り立つ鳥が数羽目に入った。

つぶらな目が何かを訴えている。それにため息ひとつ。

毎日毎日訪れる鳥達が聞きたいことなど決まっている。けれどまだ三日だ。何の進展があるものか。

思いながら窓を開けるのは、男が神子を訪れるより前から、鳥達が神子に会いに行っていたことを知っているからだ。ずっと憂いていたことを知っているからだ。

だから鳥達が望むように神子の様子を語る。男が見た神子の様子。

男に切ないほどに訴えかけてきた声…神と同じように、この鳥達も男に訴えかける。

何故自分なのか。神とは何の関わりもなかった。声を聞いたこともなかった。存在することは知っていたが、どうでもよかった。むしろ憎んだ時期すらあったのだ。その自分にどうしてあれほどまでに訴えかけてくるのだろうかと思っていた。

鳥達にしても同様だ。

男が一人で静かに暮らしていることを知っているのに。権力者と一切関わったことがないと知っているのに。なのにそんな自分にどうして神子を助けてほしいなどと言うのか。神子を助けるための権力など何も持ち合わせていない自分に。

…それはもう分かった。神子と会って、分かった。

神が、鳥が望んでいることは切欠だ。切欠を与えてほしいのだ、男に。

「…大丈夫だろう」

初めて会った日は泣かせた。そして睨みつけられて、また泣かれた。二日目はベッドから出てこなかった。それでも受け答えはした。三日目、今日はベッドから顔を出した。出して、別れる頃には窓から落ちそうになっていた。

あれはどうしてそうなったのだろう。普通に見送っていただけのはずだが、どうして身を乗り出したのだ、あの神子は。

思い出して首を傾げる。

ピ？と鳥が鳴いて、一羽の鳥が首を傾げるような仕草をする。

その鳥の頭を指で撫でて、大丈夫だ、と微笑む。

神子は男を見た。まっすぐに。

泣きはらした目で、胸の内に渦巻くだろう様々な感情を抱いて、それでもまっすぐに見た。

だからきつと、

近い未来、神と鳥達が望むように、彼女は笑うだろう。

想いと神子

考えた。

朝と違って暗い空。煌く星。静かに光る月。柔らかい、けれど少し冷たい風が髪を揺らす中、窓に腰かけて星を見上げながら考えた。

いつもこの窓から入ってきて出て行く男。

その男に向かって昼間、思わず手を伸ばして窓から落ちかけた。それが何故なのか、どうして手を伸ばしたのか。それを考えた。

帰らないで。そう思ったわけではない。断言できる。

では何だったのか。どうして手を伸ばした。男が空へと舞い上がった瞬間、覚えたあの感情は何だったのか。

手を伸ばす。

この手は何を求めたのだろう。

手を伸ばして、何を握ろうとしたのだろう。

手の先に見える月。

思わず掴めそうな気がしてしまうけれど、決して掴めない月。

ゆっくりと手を握って、やはり掴めなかったそのことに苦笑して。

諦めた。

何を諦めたのか、分からないままに諦めた。
諦めた中でただ、思った。明日は笑おう、と。

ここが私の生きていく場所。私の唯一の居場所。
だから笑おう。

周りに心配をかけてはいけない。不安にさせてはいけない。
そうすればいづれ失うのだ。この居場所を。

思い出すのは召喚されたばかりの頃のこと。
突然のことに混乱して、与えられた理不尽に憤って。
泣いて泣いて泣いて、怒って怒って怒って。そうして与えられたの
は不信の目。

知っている。

こんなのが神子なのかと言われていたことを。
間違いないのか。そうでないのならこんな神子は御免だ。
そう言われていたことを知っている。

なずなの前では神子様と敬うふりをして。笑っているふりをして。
そうして裏ではいつだって疎ましそうだった。

なずなが彼らが思う神子ではなかったからだ。
だから彼らはなずなを厭った。今ではそれもないけれど、それはな
ずなが神子になったからだ。彼らの中の神子という偶像に一致した
からだ。だからなずなは受け入れられた。

それを知っているから思うのだ。

ただのなずなになってはいけないと。どんなに辛くてもこの居場所を失えば、もうどこにも行くところはないのだから。なずなは誰もが望むように神子として王妃としてここにいないければいけないのだ。

皆が皆そうではないと知っている。

部屋から出来てきたなずなを心配そうに見ていた友人の侍女。いつも遠くから見ているくれる友人の国王親衛隊員。

彼らはただのなずなでいても側にいてくれる。笑ってくれる。それが力になる。

大丈夫。一人じゃない。

ずっとずっとそれだけが笑うための力になっていた。

それに、だ。

『だからお前を助けてくれと、俺に頼んだのか』

男に誰かがそれを頼んだ。

何からだろう。

どうしてだろう。

男は詳しいことは何も語らないけれど。

友人達じゃない誰かが案じている。

友人達だけじゃなく、誰かが案じてくれている。

裏切りはあったけれど。辛くて悲しくて仕方ないことばかりだけれ

ど。

それでもそのことが、酷く嬉しかった、から。

「明日は、笑おう」

笑おう。

友人と神子3

人気のない場所で寝転がって空を見上げながら眉をしかめる。

最近なずなを見ない。幼馴染も現われない。これは何かあったんじゃないだろうか。

そう思えば今すぐにでも二人のところに行きたいと思う。

けれど気軽に部屋を尋ねられる立場にいない自分はそれもできなくて。こうして気を揉んでいるしかない。その現状がもどかしい。

国王親衛隊なんてものになって。守りたいものを守ろうと意気込んで。なのに今の自分は守りたいもののために動けなくて。

これでは何のために厳しい試験を受けてまで国王親衛隊になったのか分からない。

最近とみにそう思う。

国を治める国王。民の生活は国王の采配一つで定まるもの。

今代の国王は賢君と誉れ高い人だ。国が危機に陥った時も神子や臣下と共に乗り切ってくれた素晴らしい人。

その人を守ることは民を守ることに繋がるのだと。守りたい人達が心穏やかに過ごすために必要な人だと。そう思っていた、のに。

「違った」

国王親衛隊はあくまで国王を守るために存在するものだ。国王が最優先だ。他のことは二の次。それが当たり前だ。

違うのに。守りたいのは、本当の本当に守りたいのは国王ではない

のに。その下で生活する人なのに。

両親に何かあっても、幼馴染が泣いていても、友人が苦しんでいても、国王に何かあれば国王が優先される。そんなことに気づかなかった。

そのせいで、なずなが姿を見せない。幼馴染が姿を見せない。そんな状況なのに国王親衛隊である自分は会いに行けない。

彼女達は神子とその侍女だ。国王からの寵愛を失った王妃とその侍女だ。だから会いに行くことは許されない。

泣いているかもしれないのに。苦しんでいるかもしれないのに。なのに側に行くこともできない。

そんなことをしたかったわけではない。そんな状況を甘んじる立場など望んでいなかったというのに。

「くそっ」

どんとと拳を地面に叩きつける。

空を睨んで歯を食いしばって、もう一度拳を地面から浮かして叩きつけようとした時、だ。

「久しぶり」

目の前に現われたなずなに驚いて目を見開く。

そして、あれ？と間拔けた声を上げれば、あははと笑い声。

「歩いてたらさぼってるの見ちゃったから」

「…さぼってないぞ」

体を起こしながら言えば、なずなが、へえ、と疑わしそうに見てきた。

「じゃあ何してたの？」

「睡眠という人間に必要な休息を」

「それをさぼってるって言うのよ、馬鹿」

なずなは前にいるのに後ろから頭を殴られた。

振り向けば思った通り、幼馴染がいた。

幼馴染はそのままなずなの隣に立ってなずなの腕に抱きついた。なずなが笑う。

その姿に目を細める。

ああ、前はよく見た光景だ。

そう思って首を傾げる。

そう、前はだ。なずなが部屋を移る前。なずなが声を出して笑わなくなる前。

「え……」

そうだ。そうだそうだ！けどなずなはさっき笑った。以前のように笑った。

え、え、え、と湧き上がる喜びと戸惑いに幼馴染を見ると嬉しそうに笑った。それに泣きたくなった。

何もできなかったけれど。側にもいらなかったけれど。

それでもずっとずっと願ってた。また笑ってほしいと。そんな日がきてほしいと。

だから笑った。

なずなが声を上げて笑う。

幼馴染に近づいて、驚かせて、そして楽しそうに笑う。

それがどんなに嬉しかっただろう。どんなに泣きたかっただろう。

なずなはある日、突然部屋に閉じこもった。閉じこもって部屋から出てこなくなった。

何があったのだろう。言ってほしかった。でもなずなは何でもないと、一人にしてと扉を開けてはくれなかった。

それから三日。国王からの先触れがきた。なずなに会いに行く、と。なずなを心配した周りが現状を国王に報告してしまったからだ。確かになずなが三日も部屋に閉じこもったことはなかった。それだけ辛い何かがあったのだと思えば気が気ではいられない。よく分かる。分かる、けれど。

そうして訪れた国王。

責められればどんなにいいだろうか。思いながらもなずなの部屋に通して。

しばらくして戻ってきた国王がなずなを連れ戻ってきた。

なずなは少しすっきりした顔をしていた。心配かけてごめんね、と笑った。

嬉しかった。嬉しくて、けれど悔しかった。結局この国王は未だなずなにとって部屋から連れ出せるほどに大きな存在なのだと思えば悔しかった。こんなにも思われてるくせに、と憎かった。

それからだ。なずなが以前のような姿を見せるようになったのは。完全に、ではないけれど、それでも少しずつ。少しずつ。

これも国王の力なのだろうか。そう思ったけれど、国王が去る前に見せた何とも言えない顔。何かを言いたいのに言えない。その顔が気になった。それに対したなずなのどうしたの？という顔が気になった。

一体何があったのだろう。なずなの部屋で何が。

何でもないとなずなは言う。言って笑う。散歩に行こうと腕を引く。その姿を見ていると思う。

悔しいけれど。憎いけれど。ああ、今はそんなことはどうでもいいじゃないの、と。

だって、なずなが笑ってる。

何よりも大事なこと。

国王と神子5

何かが可笑しい、と思った。

馴染みのない香りがなずなの部屋でした。

けれどなずなは何のことだと言わんばかりに首を傾げた。だから気のせいかと思ったのだけれど。

少しの違和感。それをなずなから感じた。

それが一体何なのかは分からない。けれど確かに感じた。

なずなが微笑む。

扉を開けた時は困惑していたようであったのに。いつもならば浮かべる微笑も浮かべなかったというのに。

なのにいつものように微笑んで。いつものようにこちらを氣遣って。いつものように。

それもこれも香りに気づいた時からだ。それからなずなはいつも通りになった。

始めに見せた困惑を綺麗に消して。

「何かを、誤魔化そうとした？」

いや、煙に巻こうとした。レガートの意識を逸らせようとした。何から？…香りから？

何故。どうして。あの香りに一体何の意味があるというのか。

気になるのは胸に痛みが走ったからだ。なずながレガートに何かを隠そうとした。それに傷ついたからだ。

…勝手だけれど。

ふ、と回廊から庭を見る。足を止める気などなかった。なかったけれど止まった。

見えるのはなずなだ。腕に抱きついているのはなずなの侍女。そしてまるで泣いているように腕で目をこすっている男。着ている制服は国王親衛隊のもの。

なずなが申し訳なさそうに笑って、男の頭を撫でた。侍女が腕を伸ばして男の頬をつねった。男が何かを叫んで、なずなと侍女が声を上げて笑う。

その姿に目を見開く。

あんなふうに笑うなずなは久しぶりに見る。レガートがまだなずなを裏切る前によく見た姿。

それに胸がざわついた。

なずなが笑う。

以前のように笑う。

それが意味することはなんだろう。

その切欠はなんだったのだろう。

胸が、ざわつく。

魔法使いと神子5

朝は聖堂で祈りを捧げる。

小一時間祈った後、神官と話をし聖堂を出る。外で待っているのは護衛の兵士二人。

彼らに守られながら城へ向かって歩く。辿りついた部屋で待っているのは友人である侍女。

彼女とおしゃべりして、お茶をして。時に散歩に出かける。

散歩の途中でもう一人の友人を見つけて、三人でおしゃべりして、またねと手を振る。

昼からは少し忙しい。王妃としての仕事が続いている。

孤児院や医療院などへの訪問が主な仕事だ。

人気取りといえは聞こえは悪いが、こういったことが国民を上げちやんと思っているのだと安心させる要素になる。国民が国王を信頼すれば国も荒れない。

夜は夜会を開く。

貴族との繋がりを緩めないため。そして情報収集のため。

国を治める国王の支えとなるのが王妃だ。だから貴族の動き、噂話を把握することを疎かにしてはいけない。国を守るために必要なこと。

訪問の予定がない昼、夜会がない夜は一人部屋でのんびりと。時には窓からの訪問者と話をして過ごす。

話。

外の話。

城の外の話。

慈善訪問をしているとはいえ、馬車に乗って目的地へ一直線だ。寄り道などしない。だから知らない、外の様子を訪問者は話す。

街道で盗賊が出たけれど無事捕縛されたという物騒な話から、パン屋の若奥さんが二人目を生んだという微笑ましい話まで実に様々。そんな話を聞くのがいつしか楽しみになっていたけれど、同時に辛かった。

この世界に呼ばれるまでは当たり前だった。外に出て、街で遊んで、店の人と接する。何も特別じゃない、ごくごく当たり前のことだった。

それがこの世界ではできない。してはいけない。そういう立場にあるのだ。

それに気づけばあまりに違う故郷とこの国における自分の差。それを思い知らされて、唇を噛んだこともある。

そついう時、訪問者はぼん、と頭を撫でる。撫でながら話を続けるのだ。

訪問者はそつして一時間ほど話をして帰っていく。空へと高く高く上っていく。その度に手が伸びる。

…その手を引つ込めるまでの時間が延びてきたことに気づいたけれど、手が伸びる理由同様分らない。

何のつもりなのだろうか。何がしたいのか。

自分に向けての問い。そして訪問者に向けての問い。

それは日毎に色濃く脳裏に焼きついていくのだ。

恋人と神子4

今日は雨だ。

窓から空を見上げれば、黒い黒い雲。ざーざーと激しい音を耳に、これではあの男は今日はこないだろうと部屋に視線を戻す。

さて。なら今日はどうしよう。

男は毎日きていたわけではない。だから改めて考えるものでもないけれど、空いたこの時間をどうしようと首を傾けた。

友人とお茶？

いやいや、今日はばたばたと忙しそうだ。かといって手伝おうか、とは言えない。友人ではあるが主でもある自分が手伝いを申し出ることはよろしくない。

散歩、は無理だ。雨が降っている。

なら。

浮かんだ案に暫し悩んで、けれどよし、と頷いて部屋を出た。

向かう先は図書室。

告げた瞬間、友人が険しい顔をしたけれど。その理由も知っていたけれど。それでも大丈夫と笑って目的地へと向かった。

なずな！と呼んで着いてこようとする友人に、大したことないんだから仕事優先！と滅多に使わない命令までして。

友人が図書室に行くというだけで、どうしてあんなに険しい顔をするのか。それを知っていて置いてきた。

どうしようと迷ったけれど、行くと決めたのは自分だ。暇になった時間を本で埋めようと思ったから。そして、もうひとつ…。

雨の音。

ザーザーと降る雨。

夜のようにとまではいかないけれど暗い庭を横目に回廊を歩く。

なずなが住んでいる部屋は城の端。以前住んでいた部屋は城の中心。それを繋ぐ回廊を歩く。

つまり。

図書室は城の中心にある。城の中心にはレガートがいる。そして。

「あ……」

小さな声。

視線を向ければ侍女を三人連れて、庭を眺める一人の女性。

そう、

レガートの恋人がいる。

恋人と神子5

会いにきたわけではない。会うかもしれないと思ったけれど、会いたいと思っただけでもない。覚悟だけはしていたというだけのこと。

けれどその覚悟も脆いもの。心臓が跳ねた。だってこんなにすぐ会うなんて思っていなかった。

思わず足を止めて、けれどすぐに前へと進めた。

びくつと揺れた目でこちらを見ていたレガートの恋人、確かカーシエが体を震わせた。控えていた彼女の侍女達がカーシエを守るように場所を移動したのを視界に、ああ、彼女に何かするのではと疑われているのかと気分が落ちた。

確かに彼女になすなは夫を奪われた。彼女が奪おうと思って奪ったわけではないとしても、結果を見ればそういうことなのだ。だから彼女達は警戒する。夫を奪った女に何らかの報復を受けるのではと今までなすなは彼女に近づきもしなかった。なのに今は近づいてくる。警戒は当然か。

そう思いはするものの、その事実はずなを傷つけた。

そんな女になれたらよかった。怒って、憎んで。そうできれば感情を閉じ込めずにいられるだけ楽だった。でもなれなかった。なった先のことを考えて、閉じ込めた。

一歩一歩近づく。

カーシエの目が揺れて、揺れて。胸元の手が震えて。そしてゆつくりと目が閉じられた。まるで覚悟したように。憎しみを、罵倒を全て受け止めると言わんばかりに。

けれどなずなはそのまま横を通り過ぎる。

声はかけない。かけて話すことなど何もないし、口をついてでる言葉は恐らく恨み言だ。

憎んでいるわけではない。ただなずなの中にはたくさんの恨み言があるだけだ。彼女に対してだけではない。それにはレガートや宰相に対してのものも含まれている。

誰にも言わずに溜めているそれが堰を切れば、恐らくもう止められない。傷ついた表情を見ても、例えば泣かれても、言い尽くすまで止まらない。

だから今まで会わなかった。姿を見るのが辛いから、惨めになるから。それだけではなく。

表に出さないようにしているものが溢れ出すのが怖いから。全て言い尽くした後が怖いから。

それでもいつまでもこうしているわけにはいかない、と思った。

ずっとずっと彼女を避けていられるわけではない。彼女の存在が国民に知れた時、彼女を庇うのならば接触は避けられない。少しずつ、少しずつ、彼女に近づくことに慣れなければ、と思った。

彼女に近づいても、彼女と言葉を交わしても笑っていられるようにならなければ、と思った。

少しずつ、少しずつ。少し、ずつ。

「み、こ...様...っ」

だから近づかないで、ほしかったのに。

恋人と神子6

恋した人はこの国の国王だった。そして神から遣わされた神子の夫だった。すぐそこにいても、手が届くはずのない人だった。

なのに、どうしてだろう。届いたのだ。甘い微笑みが与えられ、手が差し伸べられたのだ。

取ってはいけない手だった。どんなに望んでも現実にはいけない夢だった。

だからその手から目を背けて。もう二度と会うまいと誓って。誓って、誓って、言い聞かせて、言い聞かせて。

苦しかった。

辛かった。

毎晩泣いて。毎晩忘れろと繰り返して。

あの人には妻がいるのだと。この国を救ってくれた神子がいるのだと繰り返して。

泣きつかれて眠れば夢を見た。

あの手を取る夢。幸せに微笑む夢。あの胸に抱かれる夢。何も思い煩うことなく、ただ愛しているという気持ちのままに振舞える夢。

目が覚めて襲うのは空虚、絶望、罪悪。

やめと。忘れさせて。こんな想いは捨てるべきだと。

なのに、いつそ命じてくださればよかったのに、なんて思っ。そうしたら逆らえなかった。そうしたらこんなに苦しまなかった。

あの人を愛している。けれどあの人には妻がいる。神子である妻が。だから打ち明けられないこの想いが辛かった。差し伸べられた手に背を向けることが辛かった。

けれど命令されたならその手を取れた、なんて思って。その手を取らざるを得なかった、なんて思っ

そんな自分の醜さに、また、泣いて。

それに疲れた。

疲れて、疲れて、疲れて。

ふらふらと歩む足は、知らず知らずにあの人と出会った場所へ。

そこにあの人はいつもいて。カーシエ、と呼んでくれて。短い時間だけでも話をして。

それだけのことがとても、とても…幸せだった。

カサ、と音がして、我に返る。

何をしているのと。どこに行こうとしているのと。だめよ、帰らなきゃ。そう思ったのに。

辿りついたその場所。そこにあの人がいたら、どうしたらいいの、なんて、思ったくせに。

誰もいない場所。

いつもそこにいた人はいなくて。
自分ただ一人がそこには、いて。

ぼろぼろと零れる涙。

瞬きも忘れて、涙が流れるだけの目を逸らすこともできず。

手を、取りたかった。

本当は差し出された手を取って、その胸に飛び込みたかった。
何も考えずに、私も愛していますと告げたかった。

告げたかった……！！

崩れ落ちたその体を掬い上げた腕に。
カーシェー！と呼ぶ声に。

縋りついた時は、もうその人のことしか考えられなかった。
他のことなんて何も、何一つ考えられなかった。

「レ、ガート様……っ」

私も愛しています。

切れ切れに告げた言葉は止まらずに、何度も何度も繰り返した。

その瞬間から、あの人に愛される。あの人を愛せる。その立場は自分のものになった。

けれどどうして優越を感じられるだろう。

この幸福を手放したくない、と思った。でも怖かった。周りの視線が怖かった。周りの声が怖かった。

神子である王妃から夫を奪ったそのことは、非難されるに十分だと分かっていた。両親も国王の愛人となった娘に喜びながらも、周りに対して多少の警戒を抱いていた。
その状態に怯えた。

何かを言われたわけではない。それでも怖かった。いつか誰かに言われるのだろう非難。国民に知られた時の罵倒。それら全てを思うと怖かった。怖くて怖くて、それでも離れられなかった。

守られて。いつだって守られて、逃げていた。

すでに妻ある身の人を愛して、差し出された手を取ったのに、向き合うことから逃げていた。

非難を受けることだって、全部全部受け止めなければいけなかったのに。戦わなくてはいけなかったのに守られてばかりで。怯えてばかりで。

だめだ。

それでは、だめだ。

これは自分が選んだ道。

自分が進んだ、道なのだから。

まだ彼の方が、その気持ちを受け止められるだけの準備ができていないだなんて、少しも思わずに。

恋人と神子7

走る。

走る走る走る。

『私、はっ、陛下を、レガート様を愛して、います』

あなたがいらつしやることを知りながら。

あなたから奪うことだと知りながら。

その手を取ってしまいました。

彼女は泣きそうな顔で、それでも必死にその想いを語った。

どれだけレガートを愛しているか。そのせいでなずなに与えた傷から逃げていた自分。ちゃんと向き合わなければいけなかったのになずなの抱える思いを全部、受け止めなければいけなかったのにと。

怖かったのだろう。震える手を胸元で握って。なずなを揺れる目で、けれど逸らさずに見て。

その弱さと強さに、やめてと叫んだ。

『私、は！私はここしかいられる場所がないの、に！全部吐き出せるわけ、ないのに！』

まだそこまで行けない。まだそこまで行けないのだ。

受け止めなければと思っても、まだ受け止められない。だからといって抱える思い全て、なんて吐き出せるはずも、ない。

『神子は我が国の平和の象徴です。そして陛下の最愛の方。そんな

民を裏切るわけにはいきません』

思い出す宰相の言葉。

『お前がどこにいても分かるように、魔法がかけられている』

思い出す男の言葉。

神子だから。

神子だから夫に裏切られても、城に留まれた。

神子だから夫に裏切られても、城に縛られた。

神子だからここにいられた。

神子だからどこにもいけない。

神子だから。

神子だから。

神子だから。

『勝手なこと言わないで！！！！』

あなたはどこにだって居場所があるくせに。居場所を失った私と違
うくせに。なのに唯一の居場所を奪われないために押し止めてる言
葉を聞きたいなんて。

それがどれだけ残酷なことなのか、知らないくせに。

目の前に回廊の終わり。この先はなずなの生活区域。なずなについでてくれた人達が働いている場所。友人が笑っておかえり、言ってくれる場所。

怯えたように足が止まる。

だめ、そう思った。

こんな状態で帰れない——だって絶対に心配させる。

誰にも会いたくない——だって何を言うか、自分でも分からない。

そう思った瞬間、叩きつけるような雨が降る庭へと飛び出した。

魔法使いと神子6

「凄い雨だな」

粉にした薬草を小瓶に入れて、戸棚に片付ける。

屋根を叩きつける音が耳にうるさい、と集中が途切れた今になって思う。こんな日に外に出る気にはならない。というよりも、こんな雨の中、箒で空を飛ぶなど自殺行為だ。

だから今日は神子の元を訪れず、減ってきた薬草の補充をしていた。母に教わった知識。怪我であれ病気であれ、魔法で治せる魔法使いである自分には、本来必要ないもの。

眉をしかめる。

思い出した記憶にため息をついて、使った道具を片付けようと道具に手を伸ばす。

が。

「…っ」

頭に割り込んできた映像。

準備もなく突然のことだったせいか、頭痛がして額を押さえる。

雨だ。

激しい雨が降っている。

「な、に」

ばしゃばしゃと音。
荒い息遣い。

目を強く強く瞑る。
治まってきた頭痛。

『――――！――』

押し殺した悲鳴。

その主が汚れるのも構わず土の上に崩れるようにして膝をついた。

「――」

目を開ける。

あれは、と唇が動いて。

早く早くと焦る気を感じる。

今の映像を見せたものの気。

「どうしてそんな状態になっている!!」

叫んでも答えは返らない。

男はロープを羽織って箒を手取る。そして激しい雨の中、乱暴に開けたドアから躊躇い一つなく外へと飛び出した。

魔法使いと神子7

耳を強く塞ぐ。

目を強く瞑る。

歯を強く食い縛る。

何かを叫びだしたくてたまらない。

叫んで叫んで叫んで。そうしたらすつきりするだろうか。そう思うのにできない。

だってしたら終わりだ。したらここにさえいらなくなる。もう帰れないのに。もう故郷には帰れないのに。

会いたかった。

父親に。母親に。会って抱きつきたかった。泣いてただいまと言いたかった。今まで何をしていたのか、何を思っていたのか、全部全部伝えたかった。

そうしたら二人はどうするだろう。怒るだろうか。泣くだろうか。それとも笑ってくれるだろうか。

会いたい。

会いたい、会いたい、会いたい！

どうしてこんなに我慢しなくちゃいけないの。

どうしてこんなに辛い思いをしなくちゃいけないの。

もうここは嫌。ここは嫌なの。帰りたい。帰りたい。帰りたい……！！

渦巻く思い。

ぼろぼろと零れているはずの涙は、激しい雨のせいで分からない。
時折洩れる嗚咽も聞こえない。
なのに。

なのに、だ。聞こえたのだ。ぱしゃ、という地面を踏む音が。

びくつと震えた。

誰、と怯えた。

すぐ近くで聞こえた音。

怖くて、怖くて。見られたこの姿にどんな言い訳が通用するのだろうかと怖くて。

ゆっくりと顔を上げて、目を見開いた。

「何をしているんだ」

ローブを被った男。

手には箒。

こんな雨の中、くるはずのない、なすなだけが知る訪問者。

「ど、して」

「どうしてここにいいのか？それはこちらの台詞だ」
雨になど打たれてないで部屋に戻れ。

男の言葉に思わず体を引いた。

「い、や」

「このまま雨に打たれているつもりか？」

戻るぞ、と手が伸びてきて、なすなの腕を掴んだ。それを慌てて振

りほどく。

「いや!!」

戻らない。戻れない。戻りたくない!

耳を塞ぐ。目を瞑って頭を振って、男の言葉も何も聞かないのだという態度を見せる。

見えない眉がしかめられたのも知らず、髪が地面に重なるまで体を縮こませた。

「神子」

「やめて!!」

男が呼びかければ返る悲鳴。

それに男が驚く。

「神子なんて知らない!私はなずなだもの!沢野なずなだわ!」

そうだ。なずなだ。ずっとそう呼ばれていたのに。

「勝手に召喚して!勝手に神子にして!私が神子らしくしないと勝手に失望して!ふざけないでよ!ふざけないで!!」

ただの女の子だった。何も変わらない平凡な毎日を笑って怒って泣いて過ごしていた、何の力もない普通の高校生だったのだ。

なのに自分達で解決できないからと、勝手に神子にされた。もう家には帰れないのだと言われた。初めの神子も帰らなかったのだと言われた。一生をこの世界で過ごしたのだと言われた!!

その時の絶望を、その時の悲しみを無理やり封印しなければいけなかった。解放したが最後、またこんな神子願い下げ。そう言われるのだと、我慢した。

「どうして私がしなきゃいけないの！？自分達のことじゃない！どうして知らない世界のために私が戦わなきゃいけないのよ！！」

戦ったこともないのに。

戦争のない、平和な国で生まれて育ったのに。

なのに崇められて、救いを求められて。それに答えなければ拒絶されて。

レガートだってそうだ。初めは困惑した顔をしていた。

専属となった侍女と親しくなつて、なずなが泣き喚かなくなつて安堵していた。

恋人になる少し前からは、時々罪悪感を見せるようになったけれど。罪悪感。今のように全身で、ではなかつたけれど。

「結婚しようつて言ったのに！幸せになろうつて、幸せにするからつて言ったのに！なのに他に好きな人ができたつて何よ！私は何だったの！？神子だったから！？神子だったから好きだつて言ったの！？国が落ち着いたから、だから私は用無しつてことなの！？」

抱いていた罪悪感のためではない。愛しいからだと抱きしめて、居場所になるから。そうレガートは言ったのに。奪つた居場所の代わりに、レガートの隣を居場所にしてほしいと、そう言つたくせに！

「国民のために！国のために！そのためにがんばつてたら、私はここにいられる！ここに居るためには私は神子でいなきゃいけない！王妃でいなきゃいけない！そうでなきゃ国が荒れるかもしれないから！国民が不安になるかもしれないから！そのために私はがんばつて！監視されても、信用されてなくてもがんばつて！そうしなきゃ私はどこにもいけないから！居場所を得るために、私は国のために

がんばって！！でも、ねえ、でも！！」

顔を上げた。

耳を塞いでいた手を離して、男を見上げた。

「どうして私がここまでの国のために我慢しなきゃいけないの」

この国は私から奪っていくだけなのに。

男を睨みつけるように見上げるなずなを、フードを被ったままの男が黙って見下ろす。

二人を叩く雨の音だけが庭に響く中、一体どれだけの時間が経ったのか。長い沈黙に思えたが、本当は一瞬だったのかもしれない。男が膝をついた。

警戒する、というよりは怯えたようななずなに手を伸ばし、今度は腕ではなく頬を包んだ。

そして一言。

「そうだな」

そう、呟いた。

なずなの目が見開かれる。

その言葉が何にかけられた言葉なのか理解した瞬間、思考が固まった。

男の手が頬から頭に移って、ぱんぱんと軽く叩いた。

そして目を見開いたまま男を見上げるなずなの頭をそっと抱き寄せ、囁く。

「よくがんばった」

それだけ。

後は何も言わない。ぽんぽんと背を叩くだけ、なのに。

じわり、と胸に沁みた。

流れたままの涙が更に流れ、頬を伝う。

「ふえ…っ」

胸に顔を埋めて、ずっと強く握ったままだった手を男の胸に。ぎゅ
うっと強く握れば、優しく抱きしめられて。

「ああああああああっっっ」

声を上げて、泣いた。

魔法使いと神子 8

泣き声が小さくなる。

くた、と体に重みがかかる。

それに気づいてなずなを見れば動かない。耳元で聞こえるのは寝息だ。泣きつかれて眠ったらしい。

一体どれだけ気持ちを溜め込んでいたのだろうか。

ただ一つの居場所を守るために、この小さな体でどれだけ。本当はいつだって言ってしまうたかったのだろうに。いつだって男に叩きつけたあの言葉を口にしてしまったかったのだろうに。

「居場所、か」

この世界の人間ではないなずなにとって、それは何より重要なこと。それを守るために必死で。それを守るために心を削って。そうして何が原因なのだろうか。爆発した。そんな事態にならないように、と耐えてきたなずなには悪いけれど、それを幸いだと思う。このまま溜め込んでいてはいずれ精神が均衡を崩すだろうから。

「とりあえず、温めるのが先か」

いつまでもこうして雨に打たれているわけにはいかない。

今しなければいけないのは、思考に耽ることではなく、なずなから水を拭きとって体を温めることだ。

起こさないようになずなの足を掬って抱き上げ、今更ではあるけ

れど、これ以上冷たい雨に体温を奪われないように、と顔を守るようにしっかりと胸に抱く。

そうして横に落とした箒に爪先を乗せて力を流すと、箒がひとりで浮き上がる。

男は腰より下に浮かぶそれに乗って、片手で箒の柄を握る。もう片手はなすなをしっかりと抱きしめる。

箒の二人乗りなどしたことはないが、できないことはないだろう。

問題はこの雨だ。体を痛いほど叩く雨。そして上に上れば上るほど強くなる風。

一人でも大変だった。気を抜けば飛ばされ、箒から落とされるだろうほどに。

だがこれしか方法がない。なすな一人ならともかく、男が正規の手段でなすなの部屋に入れるはずがないのだから。

「少しでいい。がんばってくれ」

箒が空へと舞い上がった。

居場所。

居場所を失った人を知っている。

失った……いや、奪われた？

この世界に生まれながら、それでも奪われた人を知っている。

その人をすぐ身近で見てきた。

その人にとっての幸いは何だったのだろうか。

その人に重い肩書きがなかったことだろうか。前向きだったことだろうか。

何度も考えた。

何度も何度も考えた。

どうしてあの人は笑えたのだろうか。

どうしてあの人は憎まなかったのだろうか。

あの人となずなは違う。

違うけれど、あの人を知っているからこそ。考えたからこそ、神は己を選んだのだろう。

己が与えられるのは切欠。

それを考え、選ぶのはなずな。

——神子ではなく、なずなが選ぶのだ。

友人と魔法使いと神子

ようやくなすなの部屋の掃除が終わった。

図書室に行くというなすなについていこうとして、命令を下されたせいでついていけなくなった。

友人とはいえ主。その命令に逆らうわけにはいかない。

けれど心配は心配。さっさと仕事を終わらせて迎えに行かなければ。

図書室はあまり人の出入りはない。身分が高ければ高いほど利用する人間は少ない。そういう人は自分では動かないからだ。だからなすなに会わせたくない国王やその恋人に会うこともないだろう。

…けれどももしもは否定できない。だから急いで仕事を終わらせて、なすなの部屋に背を向けた、ら。

バンッ

びくつとした。

振り向けば開いた窓から激しい雨が部屋の中を打ち付けていて。

風が開けたのだろうか。ああ、もう！早く迎えに行きたいのに！！

窓を閉めに踵を返して…足を止めた。窓からローブを頭から被った男が現われたからだ。

びしょぬれの男は絨毯の上に足を乗せると、驚きと恐怖で固まった侍女を見た。

「何か拭くものをくれないか」

それと着替えを。

言って、腕の中に抱いたものをこちらに見せるように動いた。

知らず落とした視線が捉えたもの。それに恐怖を忘れて目を見開いた。

「なずな！！」

駆け寄って男の腕の中で、目を閉じたまま動かない友人の頬に触れる。

ぞつとするほど冷たかった。

「な、ずな？なずな！？どうして、ねえ！目を開けて！なずな！！」

「ちよつ、待て！泣きつかれて眠ってるだけだから落ち着け！」

なずなを揺さぶる侍女から逃げるように男が後ろに下がった。その時になずなを抱きなおしたことから、どうやら落としそうになったらしい。

侍女は男の言葉に冷静になって、瞬きする。

泣きつかれて眠ってる？

死んで、ない？

揺れる目で男を見れば、男が頷いた。

また視線をなずなに戻す。

青白い顔。濡れた髪に濡れた頬。ぴくりとも動かない姿にやはり不安になるけれど、見えた。

男の胸元をしっかりと握る手。なずなの手。力が入ったその様子にようやく安堵。生きている。ほっと息をつく。

「それよりこのままだと風邪をひく。何か拭くものと着替えをくれないか」

「え…」

そして気づく。

頭から爪先まで乾いたところが一つもないはずの姿に。
さああつと真つ青になって、慌てて頷いた。

ああ、一体何があつたの。

どうして。一体どうしてそんな状態に？

ああ、ああ。こんなことなら命令に逆らってもついていけばよかった！

不審人物でしかない男を疑うことも忘れて、男の言うとおりに動いた。

恋人と神子 8

何てこと。ああ、何てことを……！！

部屋に閉じこもって涙する。

ひたすら自分を責めて、責めて、責めて。

ドンドンと激しく叩かれる扉。カーシエ！と呼ぶ愛しい人の声。それら全て無視をして。

侍女が呼んだのだろうか。誰も通すなど、誰にも知らせるなど言つたのに。

どうしたのだと、開けてくれと。その言葉にどうして答えられる？

全て受け止めるつもりだった。受け止めなければいけないと思つていた。それが自分がしたことの結果だから。

そう、思つていた。

「……」

神子の叫びを思い出す。

悲鳴のような叫びだった。夫を奪った女に対するものではなく、吐き出してほしいと告げたカーシエに対する叫び。非難。

その叫びから分かったことは己の醜さ。

カーシエは何も言つてはいけなかったのだ。神子は何も言わないのなら、カーシエもまた何も言つてはいけなかったのだ。

神子から夫を奪ったカーシエが、奪われた神子に堪える思い全てを吐き出してほしいなどと。

何て甘え！何て傲慢！

怖かったのだ。

国民に知られる日を思えば怖かった。誰も責めてこない状態が怖かった。

誰も責めない、けれど視線が告げる非難。それも次第に治まって。

安堵よりも不安。恐怖。

どうして誰も何も言わないの。ああ、いつか言われるのだろうか。安心したその瞬間に何か。

責められるのは怖い。いやだ。けれどそんな恐怖、不安を味わう毎日が辛かった。いつそ誰か口にして責めてほしいと。それを望む瞬間が確かにあった。

だからきつと……だからきつと選んだのだ。責めてくれる人を。お前が悪いと、お前のせいだと確実に責めてくれる人を。

そうすればこの苦しみから逃れられるとも思ったのか。

よりもよって神子を選んで。

確実に責めてくれるだろう、夫を奪われた妻を選んで。

彼女は通り過ぎようとしたのに。

呼び止めて、責めてほしいと願って。……ただ徒に傷つけた。

神子の目は大きく見開かれて、唇は青白く、小刻みに震わせて。顔色は青を通り越して真っ白に。次いで細められた目に怯えを見た。細い両腕は何かから身を守るように体を強く強く抱きしめて、ふらりと後退った。

壁に背をぶつけた神子は、びくんつと体を震わせて。そうして泣き出しそうに顔を歪めて叫んだ。叫んで、回廊を走って去っていった。もう少しでも一緒にいたくないと言わんばかりに、一度も振り向くことなく。

「カーシェ！カーシェ！」

レガートの声が聞こえる。けれどそれには答えない。

だって、分かった。神子の表情、行動、悲鳴。それらが分からせた。

どれだけ自分が醜いことをしたのか。

そんな姿を見せたくなかった。そんな醜い自分をレガートに見せたくなかった。

自分が悪いのだとそう言いながら。神子の言葉を全て受け止めなければいけないなんて言いながら。結局は自分が逃れたかっただけだった。自分の中の恐怖を拭きたいだけだった。

嘘ではないのに。嘘ではない、のに。なのに本当は、本当の本当は。

責めて責めて責めて。そうして最後にはきっと、認めてほしかったのだ。自分という存在を。

——
神の子である神子に、
赦しを与えてほしかったのだ。

国王と宰相と神子

カーシエが部屋に閉じこもって出てこない。

どれほど呼んでも、どれほど扉を叩いても出てこない。答えない。

何があつた。

カーシエ付きの侍女は言葉を濁す。それを無理やり聞き出して、カーシエがなずなと会つたのだと知つた。すれ違おうとしたなずなをカーシエが呼び止めて話をしたのだと。

さああつと顔から血の気が引いた。

どうしてそんなことを。

思つのはカーシエのためか。それともなずなのためか。二人のためか。

侍女は言う。

カーシエはなずなからどんな言葉でも受け止める覚悟をしていたのだと。

けれどなずなはそれに対して恐ろしいことを聞いたかのように、恐ろしいものを見たかのように走り去っていったのだと。

何がなずなをそんな行動に走らせたのか分からない。けれどその後、カーシエは口元を両手で覆い、何てことを、と真っ青になったのだという。真っ青になつて涙を流して、侍女達が止めるのも聞かずに部屋に駆け込んで。

それからはこの通り。部屋から出てこない。誰一人として側に寄ることを許さない。だからレガートに報告に上がったのだと。

それを聞いて、ああ、愛した女と愛する女。二人が傷ついて。そうして泣いている原因は己なのだと。己の行動がどれほど罪深いことであつたのか。分かっていたことだというのに、それを痛いほどに思い知った。

一向に答えないカーシエに、またくる、と告げて、そうして戻った執務室で宰相になずなとカーシエが接触したことを知らせる。どうすればいい。私は、どうすればいい。なずなに会いに行つていいのか。行つて何を言えばいい。カーシエが泣いたように、なずなも泣いているのではないのか。慰める資格などどこにもないのに、何を言えばいい。

宰相が目を見開き、顔を歪めた。

驚き、そして何かを言おうとして呑み込んで、そして息を吐く。ああ、この顔は見たことがある。カーシエへの心変わりを告げた時と同じ顔だ。

「何もされませんように」

「何も？」

「私達が神子様にできることなど、何もありませんのです、陛下」
「だが、私のせいだ。私のせいで彼女達は傷つき、泣く」

想いを告げた時のカーシエを思い出す。
目を大きく見開いて、いつも微笑みを乗せていたその顔が歪んだ。
泣き出しそうな顔で怯えたようにレガートの前から去っていった。

再びカーシエがレガートの前に姿を現わした時、カーシエは泣いていた。愛していると繰り返しながら泣いていた。…まるで悲鳴のよう。

心変わりを告げた時のなずなを思い出す。

目を大きく見開いて、いつも元気な笑顔を乗せていた顔が歪んだ。泣き出しそうな顔をうつむかせて、出て行つてと言、言った。

再びなずながレガートの前に姿を現わした時、なずなは微笑んでいた。柔らかな微笑みで、どうか幸せにと。…ただの友人のように。

彼女達は泣く。

それは全て全てレガートのせいだ。レガートが二人に与えたものだからにどうすればいいのか分からない。傷を与える自分がただ見ていただけなど……。

どうすればいいのだろう。

どうすれば彼女達は泣かない？

どうすれば傷つけずにすむ？

どうすれば、どうすれば、どうすれば。

目の前の宰相がくしゃり、と顔を歪めた。

「では！」

そして声を荒らげた。

「では、神子様を解放して差し上げられますか!？」

目を見開く。

「神子様を我々から解放して差し上げられますか」

そうすれば夫の愛人と会うことはない。この狭い世界から広い世界に飛び出し、様々なものを得ていずれは思い出に。そうしてやれるのか。

宰相の言葉に言葉を詰まらせた。

なずなを、外へ?それはなずなと離縁するということ?それとも離宮を与えるということ?それとも…。

……どれも考えたことがなかった。

なずなは神子で。なずなは異世界の人間で。なずなはもうどこにも帰れなくて。ここしか、居場所がなくて。

だからなずなは苦しむのだ。だからなずなは苦しくてもここにいるのだ。だからどうすればいいのだろう、と…。

そこまで考えて愕然とした。

そうだ。なずなはどこにも行けないのだ。行けない、と思い込んでいた。だから心変わりをして尚縛りつけていた。どこかに行かせてやることなんて考えもせずに。考える前から排除、して。

それは何故だ。どうしてそんな思い込みを、した。

「我々には神子様が必要です。この国を救ってくださった神子様は、戦が終わってなお、必要な存在です。国民の信頼が一番に寄せられているのは神子様です。我々は神子様の存在に縋って国を治めているのです」

その神子を城から出すということは、国民にどう理解されるだろうか。

不信を買いはしないか。そうしたらば、国は再び荒れはしないか。それを神子失くして鎮められるのか。

「神子様はお優しい。だから我々につきあってくださいなのです。傷しか与えぬこの城に留まってくださいなのです。それに我々は付け込んでいます、陛下」

これ以上、神子を傷つけないというのなら、神子を手放すしかない。国の平穏を崩す選択をしなくてはいけない。

宰相の言葉に、何も言えない。答えられない。
気づいた。どうしてなずながどこにも行けない、なんて思い込みをしたのか。

なずなが王妃だったからではない。なずなが異世界の人間だったからではない。愛した人だったからでもない。

愛していた。なずなを。
愛している。カーシエを。

心が移ろったとはいえ、なずなを厭ったわけではない。幸せにしかかったと思う。けれどカーシエへの想いを止められなかった。手を伸ばさずにいられなかった。彼女が他の誰かのものになるなど、耐

えられない。

そのせいで今、二人が泣いている。愛した女と愛する女が傷つき、泣いているのだ。

もう泣かせたくない。そう思うのならば、なずなを解放してやるしかない。

神子から、王妃から解放して、こんな男のことなど忘れさせてやるしかない。なのに。

「…っ」

神子が必要だ。

今はまだ、神子が必要なのだ。

国民の信頼をまだ、神子ほど得てはいないのだから。

ギリツと齒が音を立てた。

——なずなが神子だから、手放す選択肢を排除していたのだ。

魔法士長と神子

執務室から退室した宰相は、その足で魔法士長の執務室へと向かう。彼には一つの役割を任せていた。神子の監視。

王宮魔法士長の部屋には水晶玉がある。神子の部屋に張った結界と神子が身につけている腕輪。それらを繋いでいる水晶玉が。

その水晶玉は神子が部屋を出た時に反応を示す。水晶玉が光り、神子の居場所を告げるのだ。

同じものが事情を知る魔法士の部屋にある。それらは神子についていった使用人達に対してのものだ。

神子の使用人である彼らの場合は神子とは少しばかり違い、使用人達全てに同じものを身につけさせているため、それを身につけていないものと接触した時、水晶玉が反応するようになっていく。

今のところ神子に関しても使用人達に関しても何の報告もない。だが、今回はあるはずだ。神子と国王の恋人が接触したのだから。なのに何の報告も上がってきていない。不審に思うのは当然のことだ。

一体、何があったのか。

そう思う。

魔法士長は何を見たのだろう。水晶玉には一体何が映っていた？

そして水晶玉と繋がっている白紙の本。それには何が記されたのだろう。神子が生活する棟を出て、誰かと接触した時、その会話が記されるといふ本には。

魔法士長が報告を躊躇うような会話がなされていたのだろうか。

魔法士長の執務室の前、立ち止まった宰相は一度大きく息を吸う。そしてゆっくりと吐くと扉を叩いた。部屋の主からの応えがくるまでの短い間、何を聞かされても宰相として判断できるように、一個人としての自分を固く封じた。

訪れた宰相の姿を目に、魔法士長は報告が遅れたことを謝罪する。次いで、年甲斐もなく動揺してしまったのだ、と付け足せば、宰相が眉を寄せた。

神子と接触したのは国王の最愛の寵姫。その二人の間に交わされた会話。それを思ったのだろう。

その宰相に水晶玉の前に開いた状態で置いてある本を取り、神子と寵姫の会話のページを差し出す。

黙ったまま受け取った宰相がそのページに目を落としている間、魔法士長は目を伏せた。

そのページには寵姫が神子に語る言葉が書いてある。神子は一切口を開かない。神子が口を開くのは最後だけ。最後のページだけだ。そのページを読んだ宰相は何を思うだろうか。魔法士長が衝撃を受けたあの言葉に何を思うだろうか。

——私、は！私はここしかいられる場所がないの、に！全部吐き出せるわけ、ないのに！勝手なこと言わないで！！！！

目が釘づけになった言葉。

今まで語られることのなかった神子の本音を始めて聞いた。恐らくは誰も聞いたことのない。

それきり本は沈黙したが、その後、魔法士長は本から目が離せなかった。何度も何度も神子の言葉を目でなぞった。

いつも微笑んでいる神子。

何もなかったように臣下の前に姿を現わし、何事も起こっていないように国民の前で手を振る。その神子が頑なに見せなかった本音。

言いたいことはあるだろう。なのに全てを受け入れる神子に、これが神の子かと。流石神より遣わされし子だと。自分の孫と変わらぬ年の神子に感嘆の息を吐いていた。

愚かなことに。

宰相が息を詰めた。

伏せていた目を上げると、宰相の目が何度も同じ場所をなぞるのが見えた。魔法士長がしたように何度も、何度も。そして宰相は顔を上げて、これが全てか、と言った。

それが全てだ。神子と寵姫の間にあった出来事は、それが全てだから頷いた。

「この後、神子様は部屋にお戻りになられたのか？」
「いいえ」

水晶は映した。腕輪が見る映像を。雨が降る庭。つまり、神子は寵姫と別れた後、庭に出た。激しい雨が打ち付ける庭の中を。

「ですが神子様はすぐにお戻りになりました」

映像は走っていたようだったが、徐々にその速さを緩め最後には止まった。そしてしばらく、方向を転換したかと思えばゆっくりときた道を戻っていった。

そう報告すれば宰相がほっとしたように息をついた。けれどすぐに顔を厳しいものに変え、薬師が必要か、と呟いた。

ただ、監視のことは神子に知らせてはいないため、こちらで手配するわけにはいかない。だからだろう。宰相が魔法士長に要請があれはすぐに対応できるように、と命じた。

魔法士は後方支援が主な仕事だ。そのためだろうか。薬師の知識を持つものも大勢いる。そのため魔法を仕えない薬師も魔法士団の管轄となっている。

その魔法士団の長である魔法士長が了承の意を示せば、宰相が頼むと言ってまた本に視線を落とした。そうして魔法士長に本を返す。その胸の内は何を思っているのだろうか。読み取れないほどに宰相は無表情だ。

「閣下」

「辛い役目をさせる」

「…いえ」

その言葉は魔法士長に対する謝罪と、これからも頼むという二つの意味がある。

宰相は国のために存在する。国を正常に動かすための補佐役。そのために一個人としての感情を吞み込む。それは神子が遣わされるより前からずっと変わらないことだ。

その胸の内にどんな感情が渦巻いていても。

部屋を出て行く宰相の背が扉に阻まれて見えなくなる。宰相の胸の

内と同様に。

それを見送った魔法士長は、手の中の本のページをめくる。宰相が読んでいたページを、めくる。

そこにあるのは何も書かれていないページ。けれど魔法士長が手をかざすと、ゆっくりと文字が浮き出てくる。

偽りを、言った。

神子は部屋に戻りはしなかった。雨の中、神子はうずくまっていた。そこで水晶玉に映った映像が乱れたのだ。そして何も見なくなつた。何故、と目を細める中、何も見えない画面の中、本だけが動き出した。白紙のページに文章が書き出されたのだ。

それがまた、可笑しかった。誰かと会話しているようであるのに、神子の言葉しか書き出されなかったのだ。

神子の言葉から、誰かがそこにいることは確かだった。誰かが神子と言葉を交わしていることも確かだった。なのにその相手の言葉が書き出されない。

何故だ、という疑問は、再び書き出された神子の本音に吹き飛んだ。

——神子なんて知らない！私はなずなだもの！沢野なずなだわ！

勝手に召喚して！勝手に神子にして！私が神子らしくしないと勝手に失望して！ふざけないでよ！ふざけないで！！

心臓に衝撃。重い重い衝撃。

神子が叫ぶ。

何故だ。どうしてだ。ふざけるなと叫ぶ。

その言葉の数々に、ようやく知った。神子は神子であるのではなく、神子を演じていただけなのだ。誰もが求めていた神子を演じてい

ただけ。

…見捨てられないように。

思い出して思わず手で口を覆う。その言葉を目にした時と同じように、目はひたすら書き出される神子の叫びを追う。

神子は叫んだ。文字だけでは分からないけれど、それでも聞こえる泣き叫ぶ悲鳴。誰も聞いたことがない。誰も考えたこともない神子の悲鳴。

そうして神子が呟くように零した言葉にぞっとした。

——どうして私がここまで国のために我慢しなきゃいけないの。

ああ。

神子は。

神子は、ずっと。

ずっと、ずっと一人で。

ああ。ああ。ああ。

神子だから。そんな思い込みがどれほどのものを見過ごしてきたのか。

神子だから。そんな思い込みがどれほど神子を追い詰めてきたのか。

いつも笑っていたから忘れていた。

召喚されたばかりの頃の神子はとうだった？その神子をどんな目で見ていた？

それが、ああ、それが、神子を少女でなくしたのだ。少女を神子にしたのだ。弱音も吐かない。負の感情を押し込め、誰もが求める神子を演じさせたのだ。

おじいちゃん、と孫が呼ぶ顔が浮かぶ。笑って、怒って、泣く孫の顔が。

同じくらいの年の神子の姿を並べてみて、愕然とする。違うのだ。表情が違う。同じような感情を浮かべていても、それでも違う。神子はどこか…儂い。どこか諦めたような、そんな色が見えた。

本は語る。

神子が泣く声を。

叫び、泣く声を。

そこにいたのは誰だろう。

神子が本音を吐き出し、大声で泣くことを許せた誰かは一体誰だろう。

どうあっても知らねばならない。それが与えられた役目だ。なのに…。

口を覆っていた手を目に。

目が熱かった。涙は零れなかったけれど、震える体を止めることは

できなかった。

手が無意識に、神子の本音を写した本をぱたん、と閉じた。

神と神子2

この国を思う王の気持ちに応えたかった。
ただそれだけだった。

苦しめるつもりなどなかった。悲しませるつもりなどなかった。
当たり前だ。それを考えることさえなかったのだから。

召喚された神子の気持ちなど、考えてはいなかった。目の前のことが全て。見えることがその時の全て。

だから神子ではないお前自身のことを何も考えていなかった。

召喚した神子へ私は語りかけることができない。その声は届かない。
私が神子の気持ちを知る手立ては一つ。聖堂に安置されている聖杯だ。

聖杯に並々と注がれた水。祈りを捧げる神子。その祈りはその水と溶け合い、毎夜私の元にある聖杯の片割れへと流れ込む。

それを飲み干せば、祈りを捧げた神子の感情が分かる。幸せそうだと。今日は少し憂鬱そうだと。その程度だけだ。

神子が存在しない時代ではその役目を果たしはしないが、日常の一部と化していたため絶えず続けた。そのことが神という存在が忘れ去られることがなかった原因となったのだが。

再び召喚した神子。

捧げられる祈り。その水に含まれたその感情、は。

お前は泣いていた。叫んでいた。怯えていた。

あまりの悲痛な感情に、深く知ろつと意識して。そうして見えてきたお前の現状。

神子になどなりたくなかった。

家に帰りたい。

ふざけないで。

嫌い、嫌い嫌い嫌い。

憎みたい。

怖い。

我慢しなきゃ。

見捨てないで。

聞こえる様々な声。声。声。

平和を祈る声がないわけではなかった。けれどその声を覆い隠すように聞こえた声、は。

初めの神子は幸せだった。

泣いたこともあった。憤ったこともあった。絶望したこともあった。それでも水に溶けた思いは優しくかった。笑っていた。幸せなのだと、そう語っていた。そうであることの方が多かった。けれど違う。今代の神子は違った。

泣いて。叫んで。押し殺して。無理に笑って。

幸せ？幸せ。お前の幸せとは何なのだろう。そんな思いばかりが水に溶けていて。それを果たして幸せというのだろうか。

悔いても遅い。

お前を故郷に帰してやることができない。

家族に会わせてやることができない。

今の状況から救ってやることもできない。

見守るだけで。
見守る、だけで。

私の子。神の子。神の愛し子。
私がしてやれることは。してやれる、ことは… 本当に些細な。本当に本当に些細なことだけ。

私がお前を召喚したのに。私がお前を絶望に落としたというのに。
ずっとずっと見守ってきた。この国を。

初めはただ目の前にあったからだった。ただただ情性に見ていた。
その国で生きる人々を。

国には様々な人間がいた。正道を為すもの、邪道を為すもの。それらとは関係なく生きていくもの。数え上げることなどできないほどに様々な人間が。

いつしかそれを見ることが目的に変わった。そうして長い間見ていれば愛着も湧く。

戦乱の世に国を治める国王。その声は大きかった。平和を願って、これ以上の戦乱を望まず叫んでいた。まるで血を流すように、喉も張り裂けんばかりに。
それに気が引かれた。だから召喚した。最初の神子を。

最初の神子は幸せになった。愛し愛され、辛いことも乗り越えて笑って生涯を閉じた。

それが誰にでも等しく訪れるものではないというのに。ずっと人間を眺めて知っていたというのに、私はお前にも等しくそれが訪れるものなのだと信じた。盲目に。

お前は泣く。
お前は叫ぶ。

そしてお前は怯える。

私にまで捨てられるのではないか、と怯え、捨てないで、と泣く。
私の悔恨など届かなくてもいい。せめて私がお前を見捨てることなどないのだと、お前を愛しているのだと、それだけでも届いて欲しいと。

祈る。

願う。

届けと。

神の子。私の愛しい子。

お前は私が召喚した。私が、お前を。
ならば声も届かないか。幾度も重ねればいつか届きはしないか。

だから呼ぶ。その名を。
神の子。私の愛しい子。

なずな。

ひたすらに、呼び続ける。

魔法使いと神子9

耳に鳥の囀りが聞こえる。

瞼に光を感じた。

何か声を聞いたような気がする。

けれどそれがどんな声だったのか、どんな言葉を紡いでいたのか。何も覚えてはいない。

それが酷く残念だった。ただの夢で終わらせるには、酷く残念な、そんな気がした。もう一度意識を沈めれば思いだせるだろうか。そんなことを思っけれど、意識は浮上する。それに逆らえずに瞼を上げる。ゆっくりゆっくり上げて、

微笑む友人を見た。

「おはよう。気分はどう？」

「…き、ぶん？」

友人が額に手を置いた。何だろう。

うん、大丈夫そうね、と友人が頷くの不思議そうに見れば、呆れたような顔。

「熱があつたのよ？」

「ねっ？」

「二日もひかなかったんだから」

「ねっ…って、わたし？」

体がだるい。

これは熱のたるさだろうか。…いいや、これは寝過ごした時に感じるだるさと似ている。

思わず眉を寄せれば、友人は笑う。

「そうよ。もう、その人に感謝しなさいよ？その人が薬作ってくれたんだから」

「…？」

何のこと？そう思ったのが分かったのだろう、手、と言われた手。

動く…のは片手だけだった。もう片手が動かなかった。どうして。指は動く。指先だけだけれど、動く、のに動かない…のは？

深く眉を寄せて視線を向ける。どうして手が自由に動かせないのだろう、なんて思っ…ぎょっとした。

「え、え、え？」

何で！？

がばつと起き上がる。

視線の先には綺麗な顔の男。椅子があるのに何故か絨毯の上に座って、けれど顔はベッドの上に。聞こえる寝息で男が眠っているのだと知る。そしてその男の片手はなすなの動かない片手と繋がって、いて。

「こ、これ、これ！？」

友人がさらりと言った。

「あなたが離さなかったのよ？」

おかげでその人、椅子に座ることもできなかったんだから、なんて言われても。言われても！！

待つて。意味が分からない！そして誰、この人！！

ぱくぱくと口を開閉させていると、ん、という声。びくつと体が跳ねた。

声の主、男の臉が震えた。全身が固まって動けずにいるなずなの前で震えて、ゆっくりと上がって、同じくらいゆっくりと顔を上げて。そうしてなずなを映した。

それに知らず息を呑んだなずなをしばらくぼーっと見た男は、しばらく後、ああ、と声を漏らした。そして、そうだったな、と言いなから今度は体を起こし、前髪を邪魔そうに払った。

その声を知っていた。

「え、え、え」

なずなは目を大きく見開くと、ちょっと待つて、と言葉を洩らした。男が何だ？と首を傾げ、そして何かに気づいたように、ああ、と頷いた。

「今はあのロープは必要ないからな」

そうあっさりと言つてのけた男の声は、いつも窓からやってくる訪

問者と同じだ。

それほど長い時間ではないけれど、それでもいつも聞いていたのだから間違っている。ロープの下から発せられる声と目の前の男の声は同じだ。

それに気づけば愕然とする。

今まで顔を見たことはなかった。なかったけれど、まさかこんな、と声を震わせた。

「美形だなんて聞いてないわ！」

なずなは自分でも訳の分からないことを叫んだ。
侍女はなずな、と呆れた声を。男は自分の容姿に興味はないと言。
そんな綺麗な顔をして。女も羨む綺麗な顔をして。

「私に謝れ！！」

「お前は落ち着け」

何を混乱しているんだ、と男が息を吐いて、友人が笑った。

魔法使いと神子10

混乱するなずなが落ち着いた後、侍女が朝食を持ってくると言って部屋から出た。

残された二人は口を開かない。なずなは未だうう、と唸り、男はくあ、と欠伸をした。もう少し寝たかった。今度はちゃんと横になつて。

そんなことを思っていれば、突然なずながぎゃあ！と叫んだ。叫んでベッドに突っ伏した。

何事だ、と見れば、何してるの私。何してるのよ私！とベッドを叩いていた。かと思えば、ぱたり、と手が動きを止め、今度はシーツを強く強く握りだした。白くなった拳が震えている。何を考えたのか、それに気づいた男は軽く眉を寄せる。

言ってしまった。そう思っているのだろう。ずっと誰にも言わずに押し込めていた言葉を、とうとう口にしてしまった、と。

男は真っ青になっっているだろうなずなから視線を外し、椅子の背に体重をかけて空を見上げる。

ああ、二日前の激しい雨が嘘のように綺麗に晴れている。

「俺の母は一族の中で異端だった」

びくつとなずなが震えたのを感じた。けれどそちらは見ずに話を続ける。

「魔法使いの一族に生まれながら、魔法が使えなかった」

男の一族は古の魔法使いと呼ばれている。

彼らは魔法を呼吸と同じように使いこなした。今の時代、そんなふうに魔法を使えるものはない。それゆえに古の魔法使いも神子と同じくお伽話だと思われる。

けれど神子と同じく彼らも実在している。お伽話が語るように人の世から離れて森で暮らしている。

そのせいだろうか、それとも古の魔法使いと呼ばれるが故か、一族は魔法が使えるという点を酷く重要視していた。

つまり魔法が使えない母は一族にとって汚点。誰もが母を蔑んだ。

「そんな境遇でも母は卑屈になることなどなかった。魔法が使えないのならと、様々な知識を学んだ」

森の中だけでは得られない知識は、時に森を抜けて外の世界で得た森を出ることを禁じられているわけではないが、世俗から離れ、森に隠れ住んでいた一族にとってその行為は快いものではなく、母は更に蔑まれることとなり、一族が住む場所から追いやられることになった。

そのせいで母はたった一人、同じ森の中ではあるけれど、一族から離れた場所で日々を過ごすことになった。

「そんな母が父と出会い、恋をし、俺を生んだ。だが父は一族の長の末子で、長はもちろんのこと、一族の誰もが憤った」

けれど父は一族でも指折りの魔法使いで。そんな父が魔法を使えない妻とその間に生まれた子供を愛し、守る姿に誰も何も言わなかった。

…言わなくなっただけで思っただけだろうか。

「俺は父の血を色濃く引いたんだろう。魔法は使えやし、魔法使いとして優秀な部類だった。だから分かった。俺に向けられる一族の視線と、魔法を使えない母に向けられた視線の温度差が、痛いくらいに分かった」

魔法が使えるか使えないか。それだけのことが一族にとっては何より大事で。

魔法が使えない母は蔑まれ。その母から生まれた男は魔法が使えるために受け入れられる。何て愚かしい。

「だが母はいつも楽しそうに笑っていた。魔法が使える俺に母が持つ知識を与えてくれた。魔法ばかりが世界ではないからと。覚えて損はないからと」

そんな母が好きだった。

辛くても一族を嫌わない母が不思議で、そして好きだった。父もそんな母を愛していた。死ぬまでずっと愛していた。

なずなに視線を戻す。

腕を伸ばして、シーツを掴んでいる手をぼんぼんと叩く。

「独り立ちして、驚いた。森から一番近い町の住人は母を知っていた。俺は母に似ていたから、いろいろな人に声をかけられた」

一族の中に居場所がなかった母は、他で自分の居場所を作っていた。母の縁者ではないかと聞かれて、息子だと知ると最近見ないが元気なのかと聞かれて。心配、して。

「母は、たくさんの人に愛されていた」

一族からは蔑まれていた母は、一步外に出ればそこで愛されていた。それは母が動いたからだ。母が魔法が使えないということから目を逸らさず、一族に拘ることもせず、他に自分にできることは、と考えたからだ。そうして外に足を踏み出したからだ。

「お前は神子で。王妃で。だから母と違って制約は多い。だが、あるんだ。お前の居場所はここだけじゃない。自分で作れるものなんだ」

なずなが顔を上げた。

じっと見上げてくる目を見返して、頭を撫でる。

「お前が選べ。お前が選んだ道に助けがいるなら言え。手伝ってやるから」

「……どう、して？」

「そうしたいと思ったからだ」

始まりは声。神子を助けてくれと懇願する声。

決めたのは自分。直接会って、決めた。

辛苦に耐えて。負の感情を押し込めて。必死に、居場所を守ろうとしていた。

なのに与えられた裏切りに心を切り裂かれて。それでもここしかないのだと。ここを失ったらもうどこにもいけないのだと。耐えて、耐えて、耐えて。神子を、王妃を演じようとひたすらに。

痛々しかった。

母も自分が知らないところで苦しんだのだろうか。

負の感情を必死で押し殺していたのだろうか。

そう思えば、何かせずにはいられなくて。声に従うことに決めた。

今は…少し違う。

母を重ねて、ではない。ただ、なずなが笑えるような場所がほしいと思う。

「だから、お前が考えて、選べ」

「神子、なのに？」

「神子だから、選べる道もある」

頭を撫でていた手を滑らせて、頬を撫でる。

選ぶ。

なずなが呟いて、目を伏せた。

魔法使いと神子 11

顔を上げたなずながじつとこちらを見てくるのに、頬を撫でた手を下ろしてその目を見返す。

目が戸惑いに揺れている。思いも寄らなかったことを言われた、と思うのだろうか。当然だろう。神子であろうとしたからこそその現状だというのに、男は現状とは違う道があるのだと言ったのだから。それは何、となずなの唇は動かない。動いたとしても男は答える気はない。尋ねることは無意味だ。必要なのは他者の口から出る答えではなく、なずなが考えて得る答えなのだから。

しばらく目を合わせたまま口を閉じて。なずなが何を言おうとしたのだろうか。口を開いたその時、ノックの音が部屋に響いた。はっとして互いに音が鳴った扉を見る。

なずなの侍女がこの部屋には誰も近づかないように手配をしてくれたことは知っている。

男は他に見つかるわけにはいかない。自分が不法侵入者である自覚はあるし、何より場所が場所だ。王妃の寝室。そこで二人で何をしているのか、など、誰でもとっさに浮かぶ答えはひとつだろう。

だからこそ扉の向こうに警戒する。なずなの侍女でない場合に備えて壁に立てかけておいた簞を手取る。

それを見て、なずなが誰何の声をかけた。

「なに？」

「朝食、持ってきたわ。開けていい？」

その声に二人、ほっと息を吐く。

なずなの許可を得て入ってきた侍女は、ワゴンを押して部屋に入
て扉を閉めると、箒を手にした男を見て首を傾けた。

「もう戻られるのですか？」

それに頷く。

「薬はそこに。一週間分ある」

「はい、ありがとうございます」

ですが、朝食を一緒にしませんか？と侍女がワゴンを見下ろした。
なずなのための粥の他にちょっとした軽食。一緒に食べようとなず
なに誘われたのだといってもらってきたのだという。

「いや。長居が過ぎた」

気持ちだけありがたくいただく、と礼を言っ、椅子の背にかけて
おいたローブを頭から被る。そのローブを軽く引つ張られて視線を
下ろすと、なずな。

「ありがとう」

「いや」

「またくる？」

「お前の風邪が治る頃には」

今は体を治さなければいけない。それに男が話した事柄について考
える時間も必要だろう。

なずなが頷いた。

家に帰れば玄関の近くの木に止まっている鳥。ぎよっとするほど数
が多い。

どうやら心配をかけたらしい。なすなだけではなく、男も。だから大丈夫だ、と言告げれば、鳥が数羽だけ残して羽ばたいていった。

残った数羽は遅れて羽ばたいて、けれど窓の方へと飛んでいった。あれは開けるということなのだろうか。

男は玄関を開けて中に入ると、いつものように簾を立てかけて窓を開けるために足を進める。…体がだるい。

窓を開ければ鳥が中に入り、各々違う場所に止まる。何がしたいのだろうか。首を傾げる。

薬棚に乗った一羽が瓶をくちばしで突いた。何故だ。

肩に乗った一羽が髪をくちばしで引っ張った。薬を飲めという言葉が聞こえて、薬、と呟いて額に手をあてる。分らない。けれどピピピと鳥達がうるさく囀る。早くしろということらしい。

よく分からないが、もしかしくとも熱が出ているのだろうか。ローブを被っただけで雨の中を箒で飛んだ。その後は熱を出したなすなの看病をして…。ああ、風邪をひかない方が可笑しいのかもしれない。

ようやく納得してローブを椅子の背にかけて、水を片手に薬を口に含む。そして寝室へ。

ついてきた鳥が見守る…というより、監視されているような気がするのだが、その中で着替えてベッドの中に。そこで満足したのだろうか、鳥達は出て行った。

…母親か、お前達は。

呆れたように息を吐いて、けれど徐々に重くなっていく体に、どうやら本当に熱があるらしいと目を伏せる。

寝込むのは久しぶりだ。両親が健在であった頃に寝込んだのが最後だ。

両親。

なずなに母親の話をしたことを思い出す。

なずなと同じように居場所を奪われた母親。

ただ、なずなは新たに居場所を与えられたが、その居場所に固執するあまりひたすらに自分を傷つけていて。対して母は新たな居場所を自分で作り上げた。そうして毎日笑って過ごしていた。

似ているけれど違う。違うけれど似ている。だからこれから先、なずながどうするのか、何を選ぶのか男には分からない。ただ、なずなが自分で選んだ道を歩いてほしいと思うだけだ。他者に強要された道ではない、自分で選んだ道を。

「…それ、なら…そんな、に、くるしく、ない、だろう？」

苦しいと、辛いと、それら全てを呑み込んだりせずに。無理やり笑ったりせずに。苦しいことも辛いことも、笑える出来事の方が上回るくらいの毎日を過ごしてほしい。母のように、笑って生きてほしい。

あんな最低の一族の中でも、幸せそうに毎日を生きていた母のように。

宰相と恋人

神子が熱を出して寝込んでいると報告がきた。けれど薬師を派遣することはなかった。神子に一番近い侍女が薬草だけを取りにきたからだ。

神子のために以前、薬師について学んだのだと言っただけらしい。

それが真実かどうか、神子が今まで薬師を必要とする状態になったことがないため分からない。けれど神子を大切に思うあの侍女が偽りを言う理由もない。それにあの侍女ならば有り得ないことでもないと思った。

「薬師ではなく彼の侍女が煎じるといふのなら、そうそう酷い状態でもない、か」

ひとまず安堵した。そして国王へ報告に向かう。今の時間ならば執務室にいるはずだ。

暇を見つけては部屋に閉じこもった寵姫の様子を見に行っているから、執務室にいないとも居場所は分かる。

…寵姫。

魔法士長から見せられた寵姫と神子の会話を思い出す。

甘えている。それは分かっていた。

神子の優しさに甘え、神子の弱味に漬け込んでいる。それも分かっていた。

分かっていたけれど、国のために神子が必要だからと神子の心を傷つけてでも縛りつけた。

——私、は！私はここしかいられる場所がないの、に！全部吐き出せるわけ、ないのに！勝手なこと言わないで！！！！

そうだ。それとて分かっていた。

神子は何も言わない。微笑んでいるだけ。その理由とて分かっていた。

ただ、実際に本人の言葉として聞いてしまえば、分かっていた、という己の言葉が酷く軽いものに感じられた。

本当に分かっていたのだろうか。

分かっている、という言葉で己を守っていたのではないだろうか。神子を傷つけ続ける己を正当化させようとしていたのではないだろうか。

「気づいたところで、何も変わらない」

何も変えない。

国のために神子を傷つけ続ける。その選択を外すことはない。ただ。

神子に気を遣わせる。そんな今までの自分ではいけない。

恨まれたくはない。そんな己のための守りを外さねばならない。

あまりに遅すぎる決意だけれど。

朝がきた。

ただ自己嫌悪に陥って泣いてばかりいた夜が明けた。

窓から差し込む光が、あの激しい雨が去ったのだと教える。

ふらふら、と立ち上がる。

テラスの窓を開けて外に出る。優しい風が少し冷たい。

まるで昨日の雨が嘘のように静かな庭を見下ろして、ふっと思う。

今まで自分は何をしていたのだろうか、と。

選んだのは自分だ。過程はどうあれ、差し出された手を取ったのは自分だ。妻ある人に寄り添う道を選んだのは自分なのだ。

なのに自分は何をしただろうか。何もなかった。ただ寄り添っていただけだ。周りの目に怯えていただけだ。拳句に神子に救いを求めるなんて愚かな真似をしたただけだ。

「それで、誰が認めてくれるというの。誰が赦してくれるというの」

傷つく人がいることを知っていた。それでも選んだのならやるべきことはあったはずだ。

カーシエの存在を知った神子は責めなかった。微笑んで祝福をくれた。その微笑みの下に渦巻く感情を隠して。

ならばそれに見合うだけのものを返さなければいけなかった。

夫を奪った女が何もせずにとだ夫に寄り添う姿に、神子は何を思っただろうか。夫に裏切られても王妃としての勤めを果たしていた神

子に、そんなカーシェの姿はどう見えただろうか。

「私、は」

手摺りに落ちる涙。

情けない。

神子は笑っていたのに。

辛くても笑って。辛くても王妃として働いて。王のために、国のために働いて。

何もしなかったカーシェとは違って、毎日、毎日。

…何が、できるだろう。

自分には何ができるだろう。

「…違、う。できる、じゃない。しなければ」

そうでないと、自分は最低なままだ。神子をあんなにまで追い詰めた自分のままだ。

「赦しを、求めるなんて真似はもうしてはいけない。そんな資格なんてないの。私が選んだの。ずっと背負っていくべきものなの」

ぐっと手摺りの上に置いた両手で拳を作る。

間に落ちる涙。

苦しい。

胸が、苦しい。

けれどそれすらも、自分が選んだ道なのだ。甘えてばかりの自分から脱しなければ。

レガートに、神子に、もう甘えてはいけない。

魔法使いと神子 12

激しい雨が降った翌日は晴天だったらしい。寝込んでいたから知らないけれど。翌々日もまた、晴天。その後もずっと晴天。

窓の側に椅子を置いて腰かける。窓枠に両腕を寝かせてその上に顎を乗せて澄み渡った空を眺める。

いつものように窓から帰っていった男は、ここ二日ほどきていない。一人で考える時間が必要だろうと言って、しばらくこないと言った男は多分、寝込んでいる。

「くしゃみしてたよねえ」

帰る間際になっていた。

よく考えればあんな激しい雨の中、きてくれたのだ。なずなだって一晩熱を出した。男も同じ状態になっていても可笑しくはない。

「独り立ちしたって言ってたし」

一人暮らしだろう。大丈夫だろうか。

…男の家を知らないし、勝手に城から出ることもできないのだから、どれだけ心配してもどうにもならないのだけれど。

「悪いことしたなあ…」

まさかきてくれるなんて思っていなかった。

衝動的に雨の中に飛び出した。誰にも会いたくなかった。そしてあの雨だ。誰もなずなに気づくはずがなかった。なのに男はきた。

堪えていたものを関係ない男に叩きつけたのに、男はなずなを責め

なかった。失望しなかった。こんな神子は願い下げ。そんな視線すら向けなかった。

頬に触れた手は冷たかった。

撫でてくれた手は大きかった。

抱きしめてくれた腕は優しくかった。

『よくがんばった』

思い出して、ぽふつと腕に顔を埋める。泣きそう…。

だって、あれはずっと欲しかった言葉だ。誰かに言ってほしかった言葉だ。ずっとずっと、多分神子になると決めてからずっと。

褒めてほしかったわけじゃない。ただ認めてほしかった。がんばったことを認めてほしかった。神子じゃない、なずなががんばったことを。

神子としてがんばって戦って、国民を勇気づけて、癒して。

平和になってからもそれは同じで。それに王妃という肩書きがついて、貴族との裏と裏の探りあいに加わって。

名ばかりの王妃となってからは、胸の内を渦巻く負の感情を表に出さない。王妃として神子としてなずなを隠して。そうする毎日が加わって。

苦しかった。

辛かった。

心も、体も。

それでもやめられなくて。

やめたら終わりだと言い聞かせて。

痛くて。

怖くて。

がんばって。

それが全部、全部、あの一言ですうつと温かいもので包まれた気がした。耐えたもの全てがあの一言で報われた気がした。

だからだろうか。考える余裕ができた。選べ、と言われた意味を考える余裕が、できた。

神子だから選べないのではない。神子だからこそ選べる道。それが何なのか。そして、神子ではない自分はどうしたいのか。

腕に埋めた顔を滑らせるようにして横に寝かす。

そうして思い出す。聞かされた話を。魔法が使えないというだけで一族から蔑まれ、追い出された人の話を。神子だから必要とされ、受け入れられた自分とは逆の人の話。

「私の居場所は、ここだけじゃない」

男はそう言った。

だから選べと。神子だから選べないのではなく、神子だからこそ選べる道があるのだと。

「考えて、選べ」

ここじゃない居場所。

目だけ上げて空を見上げる。

片手を顔の下から抜いて高い空へと手を伸ばす。

男が帰るたびに伸ばしていた手。

その手が求めていたもの、は？

ぐっと手を握った。

友人と神子4

数日前、激しい雨が降った。叩きつけるような激しい雨。

そんな中、意識を失ったなずなを抱き上げて帰ってきたのは知らない男。見るからに怪しい男が頭から被ったローブを落とせば、滅多に見ない美人。

驚いた。

これほどに造作の整った男をこの城で見たことがないけれど、城の人間でなければなずなと接触することもできないし、なずなの部屋に入ってくることもできない。

だから、窓から入ってきた男は王宮魔法士なのだろうかと思って。なずなはいつ男と知り合ったのだろうと思って。

本当なら人を呼ぶべきだった。いくら王宮魔法士とあたりをつけても、本当にそうだとは限らないし、怪しいことにも変わりはないのだ。

けれど意識がないにも関わらず、なずなが男を離さなかったことから、なずなが気を許しているのだろうと判断した。だからなずなから無理やり引き離すことも、人を呼ぶこともしなかった。なずなの無意識の引き止めは、ここにいてと言っているようだったから。

その男は熱を出したなずなに薬を作ってくれた。急なことで薬草を持ち出せなかったということで、男の代わりに薬草を貯蔵庫まで取りにいった。それを煎じてくれた。

そのおかげか、なずなの熱は明け方には下がって。目を覚ましたなずなは…。

視線の先で、なずなが花を眺めている。楽しそうに楽しそうに、そしてふ、と空を見上げる。そうして何かを考えるようにして苦笑する。そしてまた歩いて花を見て、触って、ううん、と首を傾げる。それを幼馴染と二人、眺める。

元気になったな、と幼馴染が言う。それにええ、と頷く。

「なずなをね、元気にしてくれる人に会ったの」

幼馴染が、え？とこちらを見下ろした。

それに笑う。笑ってその腕に額を押しつけると、びくつと幼馴染の体が震えた。驚いたように名前を呼ぶ幼馴染の名前を呼んで。

「もう大丈夫かもしれないわ」

なずなは毎日何かを考えている。空を見上げて、庭を眺めて。手を伸ばしたり、して。

一体何を考えているのだろう。聞いてみれば、これからどうするか、かなあ？と首を傾げられた。

これから。

それは何を指すのだろう。国王のこと？その恋人のこと？それともそれ以外のこと？

分からなかったけれど、不安にはならなかった。

すっきりしたような顔をしているからだろうか。

何もかも受け止めるような微笑を浮かべなくなったからだろうか。

それとも、なずなが側を許していた男の存在を知ったからだろうか。不安で心配で見ていたなずなを、安心して見ていられるようになった。

あの男がなずなとどういう関係なのかは知らない。甘い関係のようには見えなかったから、友人というところだろうか。直接聞くとは思うものの、なずながあの人のことは秘密にしてね、と言うから口に出さないようにしている。どこで洩れるか分からないからだ。

秘密。どうして秘密なのか、とは聞かない。分かるからだ。なずながつきあう人間は調べられる。神子であり王妃であるのだからそれは仕方がないことだ。

なずなが友人と呼ぶ自分と幼馴染は側を許されているけれど、あの男は分らない。友人としてさえつきあいを許されないかもしれない。上流貴族の出ならばそうはならないかもしれないけれど。

…いや、そうでもないか。

「顔、凄くよかったものねえ」

「あ？」

道ならぬ関係にならないと言い切れない、と判断される可能性は高い。

国王は他に恋人を作ったのだから、なずなもいいじゃない、と思うのだけれど、国王は男でなずなは女だ。国王以外とのもしもは避けたがるだろう。

「友人としてはむかつくこと限らないわ」

「いつ！？おまつ、何して…！爪立てるな！」

幼馴染がうるさい。

それをさくつと無視して顔を上げる。知らず浮かべた笑顔。幼馴染が惚けた顔した。

「いいのよ。私はなずなの味方なんだから」

お前、俺と会話する気あるのか？

何故か目元を赤らめて目を逸らした幼馴染に、首を傾げた。

そうして花を眺めていたなずなが、微笑ましそうにこちらを眺めて
いることに気づいて、また首を傾けた。

友人と神子5

なずなと幼馴染の二人が、自分達が生活する棟にじゃれあいながら帰っていったのを見送ると、待機所に戻ろうと通路を歩く。そうして思い出すのは上機嫌だった幼馴染のこと。

無自覚なのか計算なのか。そう疑ってしまうが、限りなく無自覚だろう幼馴染の態度に一喜一憂する自分が虚しい。そう頂垂れる。あの態度はここ最近一番の機嫌の良さ故だろうか。周りに音符が飛んでいても可笑しくなくらいの上機嫌。一体何があったのだろう。なずなに何かあったようだけれど。

なずな、といえば、最近様子が変わった。ようやく声を上げて笑うようになったなずなは、けれどまだどこか影を残していた。それが最近見えない。悩んでいる様子ではあるけれど、内に籠るような悩み方ではないようだ。

「何があつたんだか」

思わず口元が緩む。

なずなの現状は何一つ変わってはいない。それは自分にはどうすることもできないことで。もっと言えば、誰にもどうすることはできないことで。

どうすればいいのだろう、なんて誰にも分からないことだ。できるかもしれない人間がいるのだとしたら唯一、国王だけだと思っている。なずなと寵姫の間にいるのは国王で。

悔しいけれど、どうしても思うけれど、なずなの夫で、寵姫の恋人である国王の一言が二人のこれからを決める。

今は国王が黙秘している状態だ。だからなすなは動けない。王妃の役割を果たしながら、真実王妃ではない状態のまま動けない。

「いつそさ、離宮与えて城から出すとかしてくれないかねえ」

そうすればなすなは裏切った夫と会うことも、恋敵と会うこともない。周りの目を耳を気にすることなく過ごせる。今よりも心穏やかに。

幼馴染に言えば、それができるなら、とっくにしてるでしょうが、と憐れみの目で見られるだろうか。

……偉い人の考えは自分には分らない。

そんなことを考えながら歩いていると、目の前に国王。後ろを歩いているのは宰相だろう。最近めつきり老け込んだ気がする。

以前幼馴染にそう言えば、まあ、色々大変よね、ああいう立場の人も、とどうでもよさそうに言われた。しかもスコーン食べながら言った。本当にどうでもよさそうだった。

そのせいか、幼馴染がいつか不敬なことをやらかさないか、少し心配になった。

しっかりと目視できる場所に国王と宰相がきたのに、ずっと脇に避ける。

コツコツという靴音が側近くまでくると敬礼。後は通り過ぎるのを待つばかり…のはずが、何故だろう。国王が足を止めた。止めてこちらをじつと見てくる。

……俺、何かしたっけ？

思わず眉をしかめそうになって、けれど何とかとどめた。

宰相が、陛下？と怪訝そうに国王を呼ぶ。それにも答えない国王は、

なずなの友人だったか、と言った。

え、と？俺、どうしたらいい？

予想外な出来事に軽く混乱するが、とりあえず先に跪いて、はい、と答える。…名乗るべきだろうか。名乗るような立場でもないのだけれど。

少し迷っていると、頭を上げるようにと言われる。本当に何なんだ。心臓が冷えたような心地だ。

「なずなの様子はどうだ？」

「はい。つつがなくお過ごしと伺っております」

「そうではない。友人であるお前の目から見て、どうだ」

は？と言わなかった自分を褒めてやりたい。

どうだ、と言われてもだ。元気だ。明るくなった。前を向いて歩き出したような感じた。さて、どの道を歩こうか、と悩んでいる状態に見える。

が、それを言うわけにも行かないだろう。国王にしてみれば嫌味にしか聞こえない。不敬罪もいいところだ。なら何を言えと。

正直、頭がいい方ではない。国王が何を望んでいるのなんて分からない。どう答えればいいのかも分からない。

「なずなは、笑っているか？」

「はい」

「それは、今もか？」

「はい」

気になる言い方だ。

国王はそうか、と目を伏せた。ならいい、と続けたその顔は、何と言えはいいのだろうか。様々な感情が入り乱れているようだった。後ろに控える宰相が国王を見た。見たけれど、その目に感情が宿ったのは一瞬。もう見えない。

国王は時間を取らせたな、と言うなり再び足を進める。その後ろを宰相が歩く。残されたのは国王親衛隊員。戸惑ったように頭を掻いて、なんだあれ、と言葉を洩らした。

魅せられたものと神子

神子の友人の国王親衛隊員が首を傾げる姿に足を止める。

こんなところで何をしているのだろ。そう思っただけに見えた背中に思わず視線がきつくなる。けれど長く見ずに視線を逸らす。

敵意など向けてはいけない。向けてはいけない。そう言い聞かせながら深呼吸。

そうして気を落ち着かせて視線を戻す。もう見えない背中代わりにこちらに歩いてくる国王親衛隊と目が合う。

「神子様といらっしゃったのですか？」

神子の友人である彼がこの通路を歩いている時はたいていそう。

居住区から出てきた神子や幼馴染と会っている。

案の定ああ、と頷いた彼は、元気だったよと笑う。嬉しそうに笑う。

「何があつたんだか、吹っ切れたみたいな感じだった」

「吹っ切れた？」

何に對して、だろう。そして吹っ切った先には何がある？

思わず眉を寄せれば、彼は何て言うんだろうな、と首を捻った。

「吹っ切れた、じゃないか？ すっきりした？」

「すっきり……」

視線を庭に。

そうして思い出す激しい雨。

見た。見てしまった。

神子が地面を穿つような雨の中を走る姿を見つけて思わず追いかけて。

激しい雨のせいで視界は悪くて、ぬかるんだ地面のせいで走りにくくて。呼んだ声も届かなくて。そうして見失った神子。

探して、探して、探して。そうして見つけたのは地面を膝につけた頭からローブを被った男。その男に抱きしめられている神子。

頭を過ぎるのは密会。

けれど違うのだと思った。神子が泣いているような気がした。雨の音で聞こえないのに、泣き声を聞いた気がした。

時折男が神子の背を宥めるように叩いて。その度に神子が縋りつくように男の胸に擦り寄って。それが原因だと思う。

泣く神子とそれを受け止める男。泣く神子。泣く…。

それに複雑な感情が身の内を襲った。泣きたかった。嬉しくて、悲しくて、悔しくて、そして苛立って。

神子が泣いているのかもしれない。いつも笑っていた神子が泣いているのかもしれない。その原因なんて限られている。

思い出して拳を握る。

やっぱりあれは泣いていたのだ。国王親衛隊員の言葉で確信する。

神子は泣いていた。ずっとずっと無理をして笑っていたのだろう神子は、きつと泣いていたのだ。

「神子様は」

「うん？」

「笑えますか」

国王親衛隊員はきよとした。そして、何故か背後を振り返った。首を傾げれば、ああ、と苦笑が返る。

「もう大丈夫。俺の幼馴染が言ってた」

神子の側近くに仕える幼馴染が、もう大丈夫と笑ったのだと。

それにそうですか、と笑った。

お伽話の中の存在であつた神子が実在することを知つた。
国王の隣に立ち、国民を勇気づけるその姿に魅せられた。

誰かが傷ついた時は必死で手当てをし、その間ずっと声をかけ続けてくれた神子。

誰かが命を落とした時は悲しみ、涙を落とし。けれど、がんばつたね、と、今までありがとう、と微笑んで送ってくれた神子。
けれど知っている。初めの頃、神子の手が震えていたことを。顔色が悪かつたことを。悲鳴を押し殺したことがあつたことを。

神子なのにな？

そう思つたのは初めだけで。

神子が震えながらもそれを隠して、一緒に戦う姿にそんな思いは消えた。

中には流石神子だと感嘆するものもあつたけれど、そうでないものもいた。気づいたもの。神子が泣いていた。がんばれ、がんばれ、と自分に言い聞かせるように一人で泣いていた。それを見たもの、だ。

いつしかその姿は見かけなくなり、代わりに国王が神子の側にいる姿を見ることが多くなつたけれど、今でも忘れられない記憶だ。

怖いのだと。

神子もまた自分達と同じように怖いのだと。

神の子だけれど、それでも同じように怖くて。誰にも知られないように。一人で泣いて。人前では笑って、励まして、戦って。

一度だけ、聞いた。

怖いのですか、と。

神子は驚いたように目を見開いて、そして否定しようとしたのだろう。首を横に振ろうとして止まった。きつと問いかけた目が真剣だったからだ。だから神子はしばらく黙って、そうして苦笑して頷いた。

怖いよ、と。

戦うのは怖い。

人が死ぬのは怖い。

ここにいること、それ自体が怖い。

そう言って神子が、ごめんね、と言った。

神子なのに怖がってごめんね、と。

それに何も言えなかった。

そんなことはないのだと、言えればよかった。けれどその時はまだ、思い描いていた神子の像が強くて。その像と震える神子との間で戸惑っていて。だから何も言えなかった。神子様、と震える声を出すことだけだった。

その時の神子の顔は悲しそうだった。微笑んでいたのに、悲しそうだった。

同じことを経験したものはいるのだろうか。知らないけれど、大勢

いる神子を慕うものの中で、神子を案じるものと、神子の素晴らしさを語るものとに分かれているのは、もしかしたら経験したものとそうでないもの、と言いかえることができるのかもしれない、と思う。

：前者に年若いものが多いことから、神子というお伽話に触れた年月の差も関係しているのかもしれないけれど。

十や二十ほどの年月、神子に触れているものと、その倍以上の年月触れているものとは浸透の具合というものは違うのではないだろうか。

神子とはお伽話の住人だった。物心つく前から読み聞かされるお伽話。それはこの国の誰にも共通する事柄だ。

そして実在するか否か。それを知らなくともこの国には神子に纏わる祭りがあつた。

年に二度、春と秋。収穫祭の始まり。聖堂の鐘が鳴り、誰もが祈る古の世、荒れた国に降り立ったという神子。神子がいなければこの実りは有り得なかった。その感謝を捧げる。

誰もが神子に触れていた。

たったそれだけのことだけれど、神子は人生に必ず関わる存在だった。そんな神子が実在した。国が混乱の世に入った時、降臨し、平和へと導いてくれた。

誰もが湧き上がった。年齢性別関係なく、誰もが。

けれど、だ。けれど。年嵩のものほどその喜びは大きかった。だから思うのだ。神子に触れた時間が長ければ長いほど、きっと盲目になっっているのだと。その時間の分だけ、神子という像が己の中ではつきりとしていくのだと。

だから機会を与られてもなお、気づかないのかもしれない。

神子だけれど、怖いのだということを。泣くのだということを。あ

まりに当然のことなのに。

だって神子より年上の人間だって怖いのだ。泣きたくてたまらないほどに怖いのだ。まだ年若い神子だって怖い。当たり前じゃないか。そう気づきはしても、大丈夫ですか、なんて、頑張っている神子に言えるものでもなくて。必死に頑張っている神子に、それを遮るような言葉は言えなくて。だから結局何も言えなくて。何もできなくて。

だから喜んだのだ。神子と国王が結婚した時、喜んだのだ。

神子と国王が結婚して未永く幸せに。それを信じたから。国王が神子を支えてくれるのだと、戦場で寄り添っていたように、神子の側にいて、神子が一人で泣くような事態にはもうならないのだと。そう思っただけで喜んだのだ。

だから憤りは激しかった。悲しみは深かった。

どうして、と罵りたかった。

あなたが支えてくれるのではなかったのか。あなたが幸せにしてくれるのではなかったのか。あなたが神子様を神子としてではなく、愛してくれるのではなかったのか。ようやく神子様は一人の女性になれるのではなかったのか。

そう、罵ってしまいたかった。

けれどできなかった。

神子が微笑むのだ。祝福するのだ。国王に愛する人と幸せに、と言祝ぐのだ。

そうした後の神子の行動は早かった。生活する棟を変わり、今まで住んでいた部屋を国王の寵姫へと明け渡したのだ。何の未練もない

とばかりに早々と去っていったのだ。そうしてめったに姿を見せなくなった。

それに対して、これまた二つの声が聞こえた。

国王の心変わり、その裏切りを許す神子の寛大さ。慈悲深さ。そう称える声と、何も言わずに悔しそうにうつむき、神子様、と呟く声。そうして城内は二つに分かれた。

どうしてですか、と泣きたかった。どうして微笑むのですか。あなたは怒っていいのだ。あなたは泣いていいのだ。なのにどうして言祝ぎなど贈るのですか。

こちらの方が泣きたくなかった。

一緒に憤りたかったのかもしれない。一緒に悲しみたかったのかもしれない。だから遠くから神子を見つめながら、どうして、と繰り返し返したのかもしれない。神子は微笑むから。憤り、悲しんだ様子を見せないから。だから余計に。

そうしている間に一月、二月、三月、と時が過ぎていく。

神子は微笑む。神子は言祝ぐ。それを眺める。

そんな状態でどんどんと月日が過ぎていく。過ぎて、いく。

小競り合いが、増えた。

大事にはならないけれど、確かに増えた。

ああ、限界が近づいているのだ、と感じる。

神子が何も言わないから。神子が微笑んでいるから。だから誰も何も言わないけれど。

王妃として神子としての役目を果たそうと頑張る神子を邪魔することになるから、と誰も何も言わないけれど。それでも限界は近づいてきていた。

あなたは本当に笑っているのですか。

また一人で泣いているのではないのですか。

そんなあなたの側に寄り添う誰かはいるのですか。

そう思っていた。ずっとずっと。神子を案じるものは誰もが思っていた。

だからこの目で神子が誰かに縋って泣いている姿は喜びと、けれどそれを与えた国王達に対する苛立ちを湧き上がらせたのだ。

神子。

神子様。

目を伏せる。

すっきりした様子だというあなたは、今何を思うのでしょうか。

もしも、ああ、もしも。

あなたが辛いと言ったならば。あなたがもう嫌だと言ったなら、私達は一緒に戦う覚悟があるのです。

けれどそんなもの、神子に言わなければ通じない。

分かっているけれど、そんなことを言えば神子は悲しむ。

ああ、ああ、ああ。どうにもならないこの齒痒さは。どうにもできない己の無力さは。

今は爆発しないように耐えるのに精一杯。

魅せられたものと神子（後書き）

不穏な感じがしますが、今のところ特に何か起きる予定はありません。

国王と魔法等使いと神子

変わった。

カーシエとなずなが会ったという日から一週間。二人の様子が変わった。

閉じこもっていた部屋から出てきたカーシエは、ただ部屋でレガートを待つだけの毎日をやめた。

カーシエの立場は国王の寵姫、愛人だ。その立場でも何かできることはと模索を始めた。ずっと周りの目に怯えていたカーシエは、怯えていた周りへと自分から関わるようになった。

なずなは公務以外はめったに出てこなかった外に出てくるようになった。生活する棟から出て、友人と会ったり散歩をしたり。そうして微笑むのではなく笑うようになった。

彼女の友人の一人である国王親衛隊の男も侍女である友人も憂いを込めた表情が薄れ、なずなと一緒に笑うようになった。それがなずなの変化を如実に現わしていた。

変わった。

二人に一体何があったのか。

カーシエもなずなも部屋から出てきた時にはもう変化していた。レガートがただ手をこまねいている間に、二人は部屋の中で何を思い何を見つけたのか。

どうすればいいのかと。

二人が傷つく原因は己だと分かっているというのに何もできなくてなずなを手放してやるのが一番いいと分かっているのに、神子を失うわけにはいなくて。

結局はどっちつかずの情けない状況だけが残って。

そんなレガートを置き去りに、愛した女と愛する女は立ち直った。
今までとは違う方向を見始めた。

ならば残されたのはレガートだ。レガートだけが動けない。方向を
定めたカーシエと、新たな方向に目をやり始めた様子のなずなど違
って、レガートだけが元の位置に立ったままで。

立ったまま、で。

書類にサインする手を止めて窓の外を見る。

青く澄んだ空。けれどレガートの心は黒い雲に覆われたままだった。

やばい。

こういう時に一人暮らしというのはよくないのだと知る。

子供の頃は母親がいた。父親がいた。だから分からなかったけれど。

「あたま、いた…」

体が熱い。

薬を飲もうにも起き上がれないから、鳥達が何とか持ってきてくれ
る。ガシャンっという音が聞こえたから、恐らく薬瓶を落として割
った。そして中身を加えて持ってきてくれたのだらう。ありがたい

けれど、体が治った時に見るのが怖い。

水も鳥達が嘴に含んで与えてくれる。薬を飲むには足りないから、喉を潤すためだけにもらうのだけれど、足りない。

食べるものは鳥達が木の実を持ってきてくれるけれど食べる気力がない。それではいけないと分かっている。このままでは治らない。けれど。

「う……」

あの雨の日の行動を後悔してはいない。いないが、頭を拭くだけで放っておいた自分には後悔している。

この調子ではいつなずなに会いに行けるかは分からない。あまり長く会いにいかないのも心配や不安を与えるだけだろう。あんなことの後なのだから。

……とりあえず寝よう。

寝て治そう。

鳥達の心配そうな目が日に日に酷くなっていくから、早く良くならなければ。

両親の代わりに側にいてくれる彼らに心配をかけるのは本意ではないのだから。

そんなことをぼんやり考えていると、側に気配を感じた気がした。何だろう、と目を上げて……思わず目を見開いた。

「あ、すり抜けた」

ここにいるはずがない。城にいるはずの王妃、神子、泣いて叫んだ女。

「な、ずな？」

一体どうして、そう思って気づく。体が透けている。ならばこれは実体ではない。意識体。それにああ、と納得する。

神の干渉。

なずなをこの世界に召喚した神は、基本的にはそれ以外にこの世界に干渉することはできない。ただ気に入りの国を見守るだけの存在だからだ。

けれど男に声を届けたように、男になずなが崩れる様子を見せたように、波長の合うものの意識に干渉することはできる。とはいってもほんの触りくらいなのだが。

なずなの今の様子も神の干渉だ。なずなは神子だから、魔法使いよりも神に近い存在だからこういったこともできたのだろう。が、だ。

「あ、ごめん。起こした？」

「いや……」

「気がついたらここにいて……えと」

「いい……わかって、る」

「え？」

どうしてわざわざ自分のところになずなを寄越したのか。見当もつかない。

というか、思考するのが辛い。

「熱、高い？私のせいでごめんなさい」

「ちが…」

「どうしよう。看病しようにも触れないし」

「いい」

「一人暮らしでしょう？お医者さん呼ばないと…」

どうしよう、となずなが眉を寄せて、ぎよつとしたように目を見開いた。

なんだ。凝視している方向を見て……ああ、と思った。

窓の下に鳥。乗れるだけの鳥が乗っていたからだ。そしてその後ろの木の枝に止まっていたからだ。たくさん。

男には見慣れてきた光景。けれど初めて見たなずなには恐怖だろう。その鳥がびびりと訴えてくるのに、ぼんやりした頭で、ああ、と頷く。

「あの鳥が、お前のところに行く、から」

「え？」

「手紙、持たせて、くれ」

「え？手紙？」

そうしたら医者のところまで持って行ってくれるからと伝えれば、はい？と目を白黒させた。

まあ当然だろう。どこの誰が鳥がそんなことをしてくれると思うだろうか。けれど大丈夫だ。幼い頃から鳥の声が聞こえて。人と交流するより鳥達と交流することの方が多い自分には分かる。この申し出は鳥達からのものだ。

「今、文字、が、かけなく、て」

代わりに書いてほしい。

言えばまだ戸惑っているのだろ。けれど辛そうに話すものだから、とりあえず頷いたようだ。それを見て、頼むと言って、ああ、やばい。意識が遠のいていく。焦ったようななずなの声が、遠い。

けれどこれで辛いこの状態から脱することができるだろう、と安堵した。

神子と友人 6

朝、なずなを起こしに部屋に入った侍女は、声をかける前にがばつと起き上がったなずなに驚いた。

思わず悲鳴を上げそうになった侍女に気づいていないのか、なずなは寝台から下りるなり書くもの書くものと繰り返しながら机に向かった。

「なずな？」

どうしたの。

声をかけるとなずなが振り返って、あ、おはようと笑った。おはようと返しながら側に寄ると、医者求むと書いた紙を折っていた。

「え、風邪ぶり返したの？」

「違う違う。私じゃなくて」

あ、これ大きすぎるかな。そんなこと聞かれても、大きすぎるって何が。

「あのね、あの人。私に薬作ってくれた人」

「ああ、綺麗な人」

「そう。高熱出して寝込んでるみたいで」

「え」

言われてみれば、雨の中外にいたのはなずなだけではない。男もびしょ濡れだった。ならばなずな同様男も風邪をひいて当然だ。

「一人暮らしたからお医者さんも呼べないみたいで」

「それは、大変ね。それでこの手紙？」

「うん。運んでくれるって」

誰が？

というより、今の会話で疑問がいくつも出てきたのだけれど。

王宮魔法士はほとんどが王宮の一角にある寮に住んでいる。自宅から通う魔法士も少なからずいるが、寮に住んでいる方が研究所からも近いし、研究の時間が取れる。

だから高熱を出しているという男も寮に住んでいるのだらうと思っていたが、医者を呼べないということは寮ではないのか。

だがいくら一人暮らしでも仕事に出てこない男を不審に思つて様子を見にくる人間ぐらいいはあるだらう。なのにどうしてなずなが手紙を書いているのだ。そしてどうしてなずなが手紙の運び手に手紙を渡すのだ。

そして何より、いつ男の様子を知つたのだ。

「あ、あれかな」

「え？何が？」

なずなが窓に駆け寄る。手には手紙。随分小さく折られているが、何の意味があつてあんなに小さく折られているのだろうか。朝から謎ばかりだ。

首を傾げながらなずなの後を追う。追つて見たのは鳥だ。鳥が二羽窓の下に舞い降りた。

一羽がぴぴと鳴いて、一羽が嘴に加えた小さな筒を落とした。あ、これに入れるのね、となずなが言つて、小さく折りたたんだ手紙を開いて、そして少し考えた後、余白を指で破つた。

くるくると巻かれる紙。それを苦心しながら筒の中へ。見ている侍女には訳が分からない。

「何してるの？」

「この子達が運んでくれるんだつて」

「…はい？」

思わず語尾を上げれば、なずなが笑つた。

「私もよく分からないんだけど、あの人がそうしてくれって言つから大丈夫なんじゃないかな」

言いながら、なずなが筒をはい、と鳥の前に差し出す。

動いた鳥は二羽。何かを探すように筒の上で首を動かして、そしてどうやら筒には小さな輪が二つついていたらしい。そこにそれぞれが嘴を開けてばく、とくわえた。

え、賢い。

思わず呟いたのは侍女だけではない。なずなもだ。

そんな二人の前から鳥が飛び立っていくと、なずながぼつりと言葉を零した。

「この世界の鳥って凄いね」

「勘違いしないように」

私もあんなに賢い鳥は初めて見たわよ。

それにしても、だ。

医者と呼べない環境に住んでる男。高熱に倒れていても誰も気づかない場所に住んでいる男。

王宮魔法士だと思っていたけれど、そうではないのかもしれない。ふと思った。

けれどももしそうだとしたら男がなずなに会いにきていること。それは城への不法侵入だということになる。国の中枢である城への。それも問題だが、大問題だがそれ以上に大問題なのが。

どうやって入ってきていたのだ。

城には王宮魔法士が張った結界がある。許可のないものは決して入ることができない結界が。無理に破ろうとすればそれは王宮魔法士に知られることになり、捕縛されて処罰されて終わりだ。

なのに男は入ってこれた。なずなといつからかは知らないが会っていた。誰にも知られることなく。

それはどうということだろか。王宮魔法士が知らない魔法を男が使えるということだろうか。

魔法士は研究によつて新しい魔法を発見すれば国に届け出る。礼金が支払われるからだ。その魔法によつて金額は左右されるが、それでもなかなか手に入らない金額であることは確かだ。

だから外にいる魔法士も研究を続けるための資金を得るため、そして自分が発見した魔法を世に認めてもらうために必ず国に申し出てくる。その中に城の結界を超えることができる魔法があつたなら、今男が結界を超えてくることができはるが。対策は必ず取られるのだから。

発見してもあえて黙っていたのだとしても、そうしてその魔法を使用していたのだとしても、王宮魔法士は誰も彼もが優秀だ。そんな優秀な彼らが揃つていて、たつた一人の魔法士の侵入を察知することができないなんてことはない。そう思うのだけれど。

王宮魔法士が張つた結界を超えてくる男。

何をしにきているのかといえば、なすなと世間話をしにきているらしい。それ以上は何も。

今までは王宮魔法士だと思つていたから、城のどこかで会つて話をするようになったのだらうと思つていたが、わざわざ外から危険を冒してなすなに会いにきて世間話だけして帰る。目的はなんなのだろう。

思わずじつとなすなを見ていれば、鳥の行方を追つていたなすなが視線をこちらに向けて、きよとした。

どうかしたの？そう不思議そうに言われて、いいえ。そう笑つて首を振つたのは、なすなが元気になっていく様子を見てきたからだ。あの男に悪い目的があるようには思えないから。

大切なのはなすなが笑つていふということ。誰も笑わせられなかつ

たなずなを、あの男が笑わせてくれたということ。だから、まあ、
いいか。そう思った。

宰相と神子2

変わった。そう思った。宰相の様子が変わった。

会うたびに申し訳なさや罪悪感を見せていた宰相が、そういうものを見せなくなった。

何があつたのだろう。どういう心境の変化が訪れたのだろう。けれどそれにほっとした。

嫌だった。

傷ついたような様子を見せる宰相が。それを厭う己の心が嫌だった。傷ついたのはあなた。でもそれ以上に傷ついたのは私じゃないのと私を縛るそのことを罪と感じるなら感じればいい。でもそれを私に見せないで。苦しくなる。辛くなる。叫びだしたくなる。

そんなふうと思う自分が嫌だった。だからほっとしたのだ。そしてもう一つ、安堵したこと。

「それでは神子様。本日はこれで…」

「そういえば、カーシエ様が教師を雇つたって聞いたんだけど」
本当？

聞けば宰相が目を見開いた。

カーシエ。レガートの恋人。彼女が教師を雇つて勉学に励んでいると聞いた。そして多くの人と言葉を交わすようになったと聞いた。彼女はレガートにただ寄り添っていた頃とは違って、レガートを支えるために動き出したのだ。

安堵したもう一つ。それがこれだった。

おそらく以前までの自分であつたらショックを受けただろうと思う。

残された居場所までも奪われる。王妃として国を国王を支えるという居場所が。そう思っただろう。けれど今のなずなは違う。

カーシエは足を一步踏み出した。なずなも違うものを見ようと視界を広げた。

ならいいんじゃないだろうか。なずなにはなずなの、カーシエにはカーシエのできることがあって。これは私のものと頑にならなくても。

神子だからこそできること。

居場所は自分で作れるもの。

「思っただけど、もしカーシエ様がその気なら私の仕事も少しずつ覚えてもらってもいいんじゃないかなって」

「な……」

「カーシエ様のこと、いつまでも隠してはおけないでしょ？」

神子である王妃がその存在を認めている、という姿勢を見せても、国民が納得するかどうかは分からない。

国を救った神子。その神子から国王を奪った。そんな解釈をされれば、なずながいくら庇ってもなずなの美談にされかねない。

「なら、せめて味方は作っておかないと」

何かをしたという実績。それがあるとないとは違う。

「ですが、神子様。逆にカーシエ様が神子様の仕事を奪った、という解釈もできます」

「だから私が一緒にいればいいじゃない。私の仕事なんだから私が教えるわ」

「は……!？」

今なら大丈夫。そう思う。

個人的な話はまだできそうにないけれど、仕事の話ならできる。そ

れだけの余裕を今は持っている。

言いたくても抑え込んでいた言葉を吐き出したからか。よくがんばった。そう言ってもらえたからだろうか。

全然辛くないかと言われたらきつと違うけれど、それでも。

「カーシエ様に伺ってみてくれる？あ、レガートの許可もお願い」

気分はすっきりと晴れているから。

*

神子と寵姫が会って、二人揃って傷ついて。そうして部屋に閉じこもっていた寵姫が、ふわりと柔らかかった目が強く輝いて。不安定だった雰囲気が出たかとしたものに変わって。そうして寵姫に教師をつけてほしいと言われた時も驚いたけれど、神子にも驚いた。決して寵姫と関わろうとはしなかった神子。実際会ってしまったら傷を負って。なのに今度は自ら関わろうとしている。

変わっていく。

誰も何もできずに現状に甘んじていた。なのに当事者である二人だけはそこから抜け出そうとしている。

神子も寵姫も何を思い、何を見たのか。二人だけが未だ戸惑う周りを置いていこうとしている。

「陛下」

神子からの言葉を伝えた瞬間、驚いて言葉を失くした国王を呼ぶ。彼は変わらない。けれど見ようとしなかったものを見た。神子を解放しない理由。それをしつかと見た。そうして更に動けなくなつた。

「なずな、が？」

「はい。カーシエ様さえ望まれるのならば、と」

神子の、ではなく、王妃の仕事を分け合おう。そう解釈しても可笑しくはない提案。

寵姫が国王の支えになろうと励むのならば、協力するにやぶさかではない、なんてどこの王妃が提案するのだろうか。

「カーシエ様に窺う前に陛下の許可をと仰ってますが、いかがなさいますか」

「…っ」

寵姫は変わった。

それは国王が一番よく知っている。

神子も変わった。

変わらないのは…。

「……カーシエには私から話す」

「かしこまりました」

苦しそうな国王に一礼した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8372k/>

役割を終えた神の子

2011年11月6日16時56分発行